

俳句雜誌

令和七年六月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十八卷第六号

水 明

2025 6月号



《今月のかな女》

梅雨の月高きに隅田川更けし

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

俳句の仲間か、或いは、旧くからの知人の家に泊まったのかと思ふ。所は、浅草から両国の間のように感じる。このあたりは、かな女の生まれ育った日本橋からも近い所であるから、何となく昔に還つたような懐旧の念を抱いている。夜中に小用を足して窓外を眺めると、隅田川に沿つて幾つかの灯火が見え、中天に梅雨時には珍しく月が輝いていた。窓際に佇み、暫し想い出に浸るかな女であった。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

鳶の足に絡み付く蛇空青し

鳥羽和風

季音月

牧神も夢路を辿る目借り時

原田秀子

季音花

俎板に王の風格桜鯛

渋谷きいち

水明集

春浅しシヤベル戸口に並ぶ街

寺町知子

鼓笛集

つばくろの旋回二百八十度

石関六弦

山紫集

雨に濡れむきだす肋春の鹿

池田雅夫

水 明

令和 7 年
6 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

庭 景 色 (作品)

花 の 刻 (近詠)

今日ありて (近詠)

百尺竿頭 主宰作品の鑑賞

ゆずり葉 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

受賞者の言葉

水 明 賞

季 音 賞

かな女賞

新 珠 賞

山本鬼之介

石井喜恵

五 明 昇

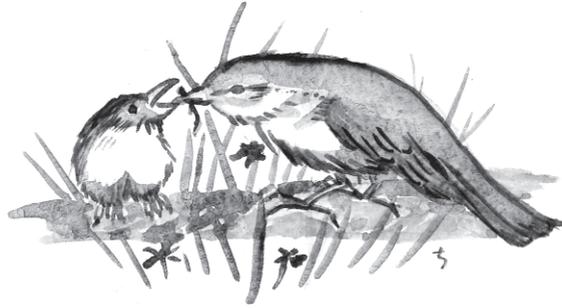
五 明 昇

檜鼻ことは

鳥羽和風 永野史代
星野和葉 ほか

原田秀子 丸山マスマ
松井由紀子 ほか

渋谷さいち 保坂翔太
横山君夫 ほか



鼓笛賞

山紫賞

あらたまの光

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

俳誌望見

句集喝采

山本鬼之介

友定洸太

網野月を

梅澤輝翠

菅原卓郎

水明集

寺町知子
菅原真理

小林京子
ほか

作品鑑賞

水琴窟（水明集四月号鑑賞）

山本鬼之介

鼓笛集

池田雅夫

山紫集

水明例会報・各地句会報

全国大会他のお知らせ

風声・発展基金御礼

後記

82

92 90 85 76 72 68 64 52 71 70 50 49 38

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

庭景色

山本鬼之介

手鏡の光の合図めかり時

廃屋をむかしに還す濃山吹

遠き日の邪心を招くチューリップ

我を迎ふる凱旋門よ大躑躅
総帆張らば五月の空へ模型船
夏めくや剣士が厚き胸を拭く
卯の花の垣根を越ゆる一の糸
水平線に船を繰り出す南風

花の刻

石井喜恵

なほ美しき逢ひたき時の初桜
再会の肩震はせり糸桜
悔ひとつある日の桜眩しとも
つなぐ手に風の優しき夕桜
篝火に浮かぶ横顔夜の桜
入水するごと大川端の桜かな
さくらさくら此の先いくつ会ひ別れ

今年も桜の季節になった。毎年
事なのに何故か心が騒つく。寒暖の
差の激しい昨日今日、心身に何らか
の影響があつても不思議ではない。
ふっと淋しかったり、昔の事が無性
に懐かしくなつたりと落付かない
日々である。年齢の所為にしたくは
ないが、案外それもあるだろう。
久し振りに立ち寄つた日比谷公園
では、散り際の桜の樹の下ベンチで
談笑する人々で賑わつていた。噴水
はリニユアル工事中との事で、色
取り取りの花を飾つた木の扉に覆わ
れていた。

今日ありて

五明昇

夏来る重ねて啜るせいゝろ蕎麦
筍に齒の機嫌よき坊泊り
アルプスの水掛け流し洗鯉
口開けのそら豆熱し縄のれん
母校先づ一勝の夜の生ビール
角打ちに盛切で酌む冷し酒
打水や深川めしの小販はひ

「幸福は胃の腑がつくつてくれる」とはフランスの詩人ヴォルテールの言葉。英国の劇作家バーナード・ショーは「食べ物を愛するよりも誠実な愛はあるまい」と述べている。

「李白は一斗 詩百篇」（杜甫）。酒仙と渾名された李白は、一斗の酒を飲み干す内に百篇の詩を書き上げたという。一休の「極楽は酒屋の門にあり」の言葉には、自由と反骨に生きた禅僧の面目躍如たるものがある。

老境に至り、少肉多菜・美酒少量・俳句三昧の暮しを希求しているが、「筆は一本、箸は二本、衆寡敵せず」（斎藤緑雨）の言葉通り、道は決して平坦ではない。

百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

三月号

しで紐をほどく指先春寒し

しで紐（四手紐・死出紐）は日本古来の極細の糸を束ねた平紐で、和菓子などの包装に用いられる。スフ糸や綿糸などの自然素材に糊をつけ高温の蒸気で乾燥させて作るが、なめらかで柔らかい反面水分に弱く切れやすいのが難点。しで紐を切らずにきれいにほどくのはなかなか難しく、指先には春先の寒気が忍び寄ってくる。

跳人のごと余寒の庭に来る雀

跳人（ハネト）は、ねぶた祭の屋台とともに練り歩く踊り手で、祭を盛り上げ観衆を湧き立たせる役割を担っている。派手なねぶた衣装に身を包んだ一団が、囃子のリズムに合わせて「ラッセラー、ラッセラー」と軽快にとび跳ねる様はまさに圧巻。余寒の庭を訪れた雀の二拍子の跳び足に、みちのくの祭を連想したユーモラスな一句だ。

降臨の千年杉や冴返る

神仏が天下り、地上に姿を現すことを「降臨」と言うが、

その依代（よりしろ）とされるのが山、岩、樹木などである。若狭一宮の下社である若狭姫神社には、千年杉として有名な巨木が聳え立ち、古来から不老長寿の神木として厚く信仰されているが、遥かなむかし、若狭姫神（豊玉姫、乙姫）はこの木の依代として現在地に鎮座されたのであろう。

神宮の神馬の朝よ水温む

伊勢神宮の神馬は内宮と外宮に飼われており、神事に重要な役割を担っている。毎月一日、十一日、二十一日の朝八時頃に菊花の御紋章のついた馬衣をまとうて神職に付き添われて正宮にお参りするが、これは天皇陛下に代わって神前に見参する大切なお役目。あざやかな衣装の神馬が堂々と参道を歩く姿を望見した朝は、まさに水温む思いであっただろう。

ワイナリー出で陶然となる遅春

ワインの需要・人気が高まるにつれて、内外のワイナリーではツアーを催し、顧客が購入を決定する前にワインを試飲できる試飲室を備えている所が多い。試飲は無料が多いが、有料でも手頃な価格で何種類かをテイスティングできる。レストランや試飲で美味しいワインを聞き召した作者が、遅春

ものものは陶然として帰路に着く姿に共感を覚える。

四月号

三月漫歩卯建の数を誇る町

卯建（うだつ）とは、屋根の両端を一段高くして火災の類焼を防ぐために造られた防火壁のことで、裕福な家しか造ることができなかったため、「うだつを上げる・うだつが上がらない」の言葉もできた。卯建のある町並みとしては徳島県美馬市脇町、同つぎ町貞光、岐阜県美濃市美濃町など有名だが、中でも美濃和紙で栄えた美濃市には卯建の上がる町家が十九棟あり、日本一の卯建の町とされている。

流鏑馬が終はりいつもの木の芽道

流鏑馬とは疾走する馬上から鏑矢で的を射る武術で、平安末期から鎌倉時代に武士の間で盛行、現在では神社などで厄払い、成長や実りを祈念する神事として行われている。春の流鏑馬としては日光東照宮の春季例大祭、埼玉県毛呂山町の出雲伊波比神社、浅草神社の正月行事を再現した浅草流鏑馬などが知られている。晴れやかな神事が果てた後の馬場の余韻と静寂を見事に捉えた一句である。

手古舞の鉄棒はづむ春祭り

手古舞（手棍前・てこまい）とは、本来江戸の祭礼において山車を先導した鳶職のことだが、現在ではこの姿を真似た

衣装を着て祭礼などで練り歩く女性たちのことを言う。秩父に春を告げる小鹿野春まつりでは、華やかな飾りつけの秩父型屋台と笠鉦が町内を巡行するが、巡行を先導する手古舞も見所の一つ。少女たちがシャンシャンとリズムを刻む「鉄棒突き」に、祭が一層盛り上がっていく。

校章に私学の誇り風光る

校章とは、その学校を象徴するためにデザインされた紋章のこと。学校への所属を表すための意匠として、正門や正面玄関に取り付けられるほか、校旗、帽章、徽章、学生証などにも用いられる。学校のイメージを統一し、アイデンティティーの形成をはかるために果たす役割は大きい。とりわけ私立学校では「建学の精神」や「自由闊達な校風」を象徴しているケースも多く、校章に誇りを持つ向きも多かるう。

唐黍の種に夢見る地平線

世界の三大穀物はトウモロコシ、コムギ、コメだが、その中でもトウモロコシは世界最大の生産量を誇っており、世界で八億七〇〇万トン以上が生産されている。トウモロコシは遺伝子組み換え体での栽培が八割を超える。光合成の効率が高く、食糧や飼料のみならず澱粉資源、工業用途、バイオエタノールの原料としても期待が大きい。唐黍（トウモロコシ）の種から、その来し方と将来を見据えた壮大な一句だ。

ゆずり葉

◆季音四月

檜 鼻 ことは

リハビリの一步が百歩青き踏む

井上燈女

寒さは残りますが、少しずつ春の気配が感じられるようになったところ、所々に枯れ草は残るものの、柔らかな緑の芽が顔を出し始めています。リハビリの一步、それは健全な時であるならば、何でもない一步ですが、現在のご自身にとって百歩にも匹敵する一步だと思えます。

「一步が百歩」の措辞から、一步の大きさ、一步のための努力と勇気が、しっかりと伝わってきます。踏みしめた足元には、春の草花がわずかに揺れ、野も空も、辺りの景色のすべてが静かに作者に寄り添っているようです。

「青き踏む」という明るい季語が、きつとりハビリの努力が報われるという作者の前向きな心情を伝えてくれているようです。

雪しぐれ骨片ひとつだけの葬

正木萬蝶

雪と雨が入り混じる寒さが厳しい日。茶毘に付されたあと、拾い上げられたのはたったひとつの骨片。その骨片を目にする者も、降りしきる雪も、そのすべてが冬の静けさの中にあります。降っては止み、止んではまた降る、そのような不安定で冷たい空模様が、人生そのものの儚さを象徴しているかのようにもあります。

骨片ひとつだけという事実が、読む人の心にさまざまな情景を呼び起こします。命の儚さと惜別の情、そして厳寒の冬景色が一句の中に織り込まれ、句の余韻に、静かに心を揺さぶられるような時間を過ごしました。

子らの歌ひびく分校福寿草

西幅公子

分校、懐かしい言葉の響きです。小学生の頃、通っていた

小学校に分校がありました。

小学校二年生までは分校に通いますが、三年生からは本校の児童となり、本校に通います。たしか、同級生の内、十人ほどが分校から来た友達で、彼ら彼女らは五キロほどの距離を歩いて本校に通って来ていました。分校にはタモの巨木があり、その西には曹洞宗のお寺がありました。今では分校は無くなり、低学年の子どもたちはタクシーでの送迎で本校に通っているようです。

句に詠まれた学校も、きっと里山の麓にある小さな分校なのでしよう。校舎の近くを歩くと子どもたちの歌聲が朗らかに響き渡ってきます。道端には、華やかな黄色をした福寿草が咲いています。福寿草の息吹と分校の子どもたちの明るい唄声、のどかで希望に満ちた小学校の光景を思い描きながら句を拝読しました。

すぐそこと言ふ道遠く春寒し

森 和子

何故だかわかりませんが、初めて歩く道は実際以上に遠く感じるものです。

お連れの方はよくご存じの道なのでしょう。「すぐそこだよ」と笑顔で言われ、その言葉に気を軽くして歩き始めたのはいいのですが、思っていたよりも道中は長く、曲がりくねった山道の先はまだ見えてきません。かすかに芽吹き始めた野草を散見しつつも、辺りの空気は冷たく、吐く息は白いま

ま。そのような情景が目には浮かびます。

「すぐそこ」と「道遠く」の言葉の対比が巧みで、「ああ、そんなことが自分にもあったな」と読者に共感を呼び起こします。「人は行ったことがない場所に行くなど、探索の度合いが高い日には、より幸福感を感じる」といったこともあるようです。目的地に着かれたときは、安堵と同時に、充実感を得られたのではないかと推察いたします。

「知らんけど」の噂話や浅き春

高橋満耶子

軽妙で親しみのある会話文化が関西にはあるような気がします。関西に住む人たちは、漫才でなくても、普段の会話の中に、それぞれがボケて、ツッコむという話術を持ち合わせているような気がするのです。柔らかいイントネーションとリズム感のある関西弁は、相手との距離を詰めすぎることなく、その場の雰囲気や和らげます。それに、会話の潤滑油となるような言葉も豊富です。「知らんけど」もそのひとつ。まったく知らないわけではないことをいろいろと話した後、ほそっと付け足すように言う「知らんけど」は、話した内容をオブラートに包み、楽しく会話を繋いでいきます。

さて、お二人なのか、数人お集まりになってのひと時なのかは存じませんが、罪のない噂話に花を咲かせていらっしやるご様子。この句を声に出して読む時は、関西弁のイントネーションで読みたいものです。

季音雪



里景色 鳥羽和風

夜桜や小半酒に身のほてり
夏めきてショーウインドー一新す
筍を獣と分かつ夕餉かな
切幣が五月の空へ地鎮祭
鳶の足に絡み付く蛇空青し

卒業 永野史代

沈丁花咲かせ本日休診日
神妙な顔の悪餓鬼卒業す
明日はもう飼育係もなく卒業
養護学級の子等の大声卒業す
卒業を仏前に告げ母子家庭

春行く 星野和葉

春眠におぼれてゐたる一日かな
桜一枝挿して膨らむ独り居間
どの花に行かうか蜂のホバリング
分封の蜂一瞬に行き去りぬ
切株のいかにも座れてふ暮春

ハグ 町野広子

距離置きて互ひに無口残り鴨
鼓草父母とはハグをせぬままに
紙ひかうきふはりと下りぬたんぽぽ野
幸せは身近にありて蒲公英野
直角に卒業証書受け取りぬ

蜜蜂 茂木和子

樹木医の花の枝振り見て廻る
あるらしい蜂にも花の好き嫌ひ
蜜蜂や日向の角を丸く飛ぶ
桜貝幾光陰の掌
あの時のあの日あの海さくら貝

花明り 森本早苗

花明り定年の娘と杯上ぐる
遊ぼうよ猫のお誘ひ春うらら
百寿まで見む世界遺産の城桜
花筏お椀の舟を出しませう
観覧車黄砂に煙る須磨明石

水面に燈 網野月を

夜桜のわづかに残りひとりばち
無言なるマラソン人や夜の桜
花の下雷紋のごと花の散る
花吹雪かな女の句碑を染めにけり
ヒアシンスハウスの孤高花は葉に

せせらぎ 石井喜恵

馬の子の初めの一步牧の朝
揺らしつつ渡る吊橋山笑ふ
ここまでは届かぬ電波山笑ふ
森と湖つなぐせせらぎ春の蟬
春の鴨夕日染めゆく中州かな

筍を掘る 井上燈女

地下足袋の踏み応へある筍掘る
筍に爪立ててみる茹で加減
勝手口に初たけの子の土湿り
探り鋤やさしく当てて筍掘る
はらはらと風を乗りつぐ竹落葉

抜け径 石山かつ子

駒走る一雨ごとの春の草
検番に琴立て掛くる春の昼
裏庭に猫の抜け径春の昼
湯薬の土瓶に滾る春の果
劇論の一句の果てや亀の鳴く

薪能 大橋 廼代

春寒や唄れごゑの太郎冠者
春蚊現る脇正面の一の松
篝爆ぜ鼓たかぶる春の宵
扇投ぐ鬼^シ女^テへ捨て身の春の蟬
薪能果てて名残の燠の色

残る花 大村 節代

顔見世の一行来たる桜季
すれ違ふ人に会釈すくらさくら
枝道を行けば深吉野春深し
洛北の小雨に煙る残る花
手を延ばせど届かぬ先の残花かな

時には 小倉 倭子

夫が持つ杖の長さよ山笑ふ
春日傘時に雨傘気まま妻
斜に構へ気取りの男の子すみれ草
他愛なく貴方を想ひ夕ざくら
口元に枝垂櫻の先触るる

春の夢 栢尾 さく子

教会の聖歌もれくる春の空
帯の如き春の路地より老婆くる
ゴンドラの歌詞の如きを春の夢
鶯のととののはぬ声昼近し
春彼岸冷えしのびよる長廊下

水温む 菊池ひろこ

今は昔の 境 延昭

池の水温みて塔の先映す
潮入りの園の岩組水草生ふ
ライスカレーと今も呼ぶ人隅田春
軽からぬ母の手鏡星おぼろ
春ねむし軽き荷を持ち山手線

大石忌今は昔の引手茶屋
鳥雲に劇画でさらふ三国志
仔馬跳ね外航船ははるか沖
湯上りのシャボンの匂ひ月おぼろ
時計屋の針はてんでん春の昼

醍醐味 五明 昇

緑 たつ 椎野美代子

露味噲や瀬音に覚むる秘湯宿
酒は「立山」酢の香ゆかしき螢鳥賊
義仲寺に偲ぶ縁や蜆汁
清貧は男の矜持目刺焼く
鍋奉行が仕上げに放つ芹一把

春はそし鹿毛色烟る樺大樹
菜の花畑置きつ放しの猫車
朗らかに大地を展く春よ春
抱卵の鳥の気分や春炬燵
命鮮やか樺大樹の緑たつ

花 明 り 島 津 初 花

花 筏 十 倉 和 子

佐内地のしだれ桜へ吹奏樂
上流まで桜満開遠く良し
赤飯の温み宛ら桜の夜
旅立ちの朝にエールを山桜
白椿祖父植ゑ置きの立ち姿

吉野出てやがて紀の川花筏
かたまりて魚道を滑る花筏
花筏突つ切る快^け樂^ら舟下り
花筏まあるく堰を越えゆけり
落城史あつく語るよ百千鳥

誕 生 日 鈴 木 康 世

耳だけは未だ健在初音聞く
石垣に螺鈿細工を飛花落花
花吹雪記憶吹き消し吹き戻す
花の昼仏具を磨く誕生日
砂場いま見らの社交場桜舞ふ

季音月

目借り時

原田秀子

目借り時鳥羽絵の蛙脚長し
片時もはなさぬクルス花大根
老いてなほ楚楚と咲きたる種大根
牧神も夢路を辿る目借り時
目借り時逢ふてもみたき音二郎

春の駒

丸山マスマ

たんぼぼの絮も乗客渡し舟
潮騒に耳欻つる春の駒
「飛鳥美人」眠る石室春寒し
桜まじ舳先に躍る大漁旗
子規庵の窓が切り取る朧月

春の雷

松井由紀子

山嶺へ別れ惜しむか春の雷
図書室の黙にさざなみ春の雷
紅筆の穂さき震はす春の雷
花過ぎの道風せいせいと通ひけり
窓明り書架に尋ぬる春の措辞

春の闇

大場順子

揺り椅子を揺らせばゆるる春の闇
語るかにみかへり阿弥陀春の闇
氷川の杜の刻む歳月竹の秋
車井戸からからからと竹の秋
花櫛の匂ふばかりや春日傘

草芳し

梅澤佐江

草芳し万葉の野にゐる心地
君に摘む春の草ゆゑうるはしき
飛び六方で花道を踏む桜時
春昼の能「卒都婆小町」の闇深き
春の灯に影の寄り添ふ昇降機

春 燈 森川 義子

名人の静かな一手春灯
境内の屋台組まるる春の昼
春草やぴんと立ちたる山羊の耳
川なりに曲がる小径や春の草
薄れ行く昭和嚙みしめ草の餅

光 舞 池田 雅夫

振り下ろす鉞朱夏の光舞ふ
青眼の光普し武者人形
少年の頬つやつやと新樹光
麦秋の地に光芒の雨二滴
大山女光を放ち宙返り

宙 荒井 俱子

首 稽 頬 すり合うて 岬馬
摘み草や跳び越えるには広き堀
春の雲起重機宙を搔き回す
人間が宙に住む都市春の月
春愁や約束なぜか重くなる

山 桜 松宮 保人

春一番派手に転げし金盃
種蒔くや山懐に抱かれて
春塵や物干し竿は日曜日
廃校の潮の匂ひや山桜
行く春を惜みて街は活気付く

春たけなは 正木 萬蝶

春闌くや推しの仏を訪ふ旅路
春深む京の都に水道橋
晩霜や玻璃の歪みし御用邸
身八つよりをんなほどけて春の闇
盲にも泪の跡や名残霜

メガホン 近藤 徹平

騎馬軍にロケのメガホン春の草
並足に騎乗の少女春の草
無住寺の縁に半跏坐春の昼
春寒や華府のくさめに江戸危篤
地球儀をもてあそぶ子ら春の昼

紫木蓮 上戸 千津子

等閑の狭庭彩る紫木蓮
林道や木の芽の匂追風に
花筏さつと面舵順潮に
古民家の土間の長さや葱坊主
春だより朱線の目立つ同窓誌

追憶 青木鶴城

棹を差す波紋に揺るる雪柳
静けさにせはしき茶筌春座敷
袖口に纏ふ移り香花衣
惜別を尾灯曳きゆく春朧
追憶を辿りて乙女つばきかな

春眠 日高道を

素つびんの朝の挨拶町うらら
日溜りは惰眠の坩堝黄水仙
白昼にヤマト現はる目借時
海市より象現はる絹の道
星朧億光年の旅の果て

春の旅 檜鼻 ことは

頬杖の隅のテーブル猫の恋
江の電や風にたなびく春シヨール
木の椅子にちひろの絵本石鹼玉
北窓を開くドレミの歌奏で
春泥や牛の声する谷の村

遠足 川崎道子

つぎつぎに城垣攻むる花筏
花筏堰越ゆる時危ふかりけり
老木の夜桜あやしお濠端
高見よりここは遺跡と雲雀鳴く
遠足の最後尾には新教師

春雷 大塚茂子

春雷や法度はつとの恋も人はして
春雷や阿吽の仁王杜守る
囀に窓辺の赤子にこにこと
右ほほに消しグムのかす春眠し
春眠の子の微笑みてドレミかな

青田 原田 自然

峡の田の株間を抜くる青田風
千枚の青田の棚田海に向く
青空と水平線や青田面
うた唄ふパイプラインや青田波
未知数の米の価格や青田風

五月来る 飛永 鼓

半島をくねくね寒し山桜
津波あり山火事かりて山桜
嘖むや交尾の蛇を見てしまふ
畦道を人の行き交ふ五月かな
抽出しに古びし青春五月来る

山笑ふ 内田 恵子

花満開生食パンの専門店
目刺食む埴輪の眼孔二つ
自由とは孤独に通じ春の鴨
灯台は飛び立つ構へ春の鳥
歩き方習ふりハビリ山笑ふ

色鉛筆 野口 和子

子ら帰るふらこ揺れを残すまま
片栗の花へ訪ふや遊歩道
色鉛筆は二十四色夕桜
卒業の校門で撮る法服よ
七人に広し講座入学式

春日傘 井上 玲子

洪鐘のわたる嵯峨野路春日傘
落柿舎へてくてく歩む春日傘
講釈師いよよ佳境に春灯
艶やかな三味の音茶屋の春灯
那須連山肩組み合うて笑ひをり

来年の桜 福田 千春

花衣まとひ今年も生きてゐる
消ゆる時は桜ふぶきの渦の中
五色の旗なびかせ奈良に風光る
伐採の木の根に発芽別れ霜
象さんのじょうろ花壇に忘れ霜

春日傘 熊倉千重子

二胡の音の震へあはれや朧月
气温差に戸惑ふ今日の花衣
おさらひへ急ぐ舞妓や春日傘
人生語る母の手の皺春惜しむ
うららけし隣家の猫に会釈され

花筏 西浦千枝子

花筏仔牛とまがふ黒バイク
生家へと急ぐ車窓の山桜
分け入りて手にいつぱいの初蕨
年忘れ思はず寝そべるげんげん田
幼子等こけつまろびつ蓮花畑

花明り 松山清子

抜歯あとの洞に潜みし春愁
半仙戯いつたりきたり我が思考
牛タンの歯応へしかと花明り
ヨーグルト冷たさ嬉し暑き春
緑濃き畑目の前新茶買ふ

毎月25日発売 定価1000円(税込) 月刊 **俳句界** 2025年 7月号

特集 60代俳人

〇近作とエッセイ
野中亮介 河原地英武 小林貴子
小川軽舟 岸本尚毅 照井翠
土肥あき子

タラビエ 俳句界NOW 名久井清流

特集 『第一句集』大解剖
〇俳人にとつての『第一句集』とは
高柳克弘
〇より楽しくなる! 『第一句集』の読み方
佐藤郁良

〇『第一句集』裏話
中原道夫 駒木根淳子 井上弘美
関悦史 岡田一実 堀本裕樹

「海、山、人、黙す―震災と言葉」展
(詩人) 座談会 季村敏夫×高木佳子×渡辺誠一郎
(歌人) 司会・小池昌代 (俳人)

「注目の句集」福本弘明 『梨の木』

連載陣 宮坂静生 青木亮人 栗林 浩 坂口昌弘 ほか

「俳句界」投稿欄 一流選者11名! 充実の投句欄

株式会社 文學の森

お求めは... 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

季音花

桜 鯛 洪谷きいち

組板に王の風格 桜鯛
 海神の氣遣ひ届く花見鯛
 春陰や捨てたる筈の日記帳
 春陰の山裾はしる飄風
 街灯の届かぬ辻の落花かな

少年の意氣 保坂翔太

三月や渡船に乗るは今日限り
 校門くぐる少年の意氣風光る
 青空や気球で巡る春の山
 定年や山の幸なる独活を採る
 仕舞には吹き出す笑ひ万愚節

竹の秋 横山君夫

園めぐる影やはらかし春日傘
 どの竹も水辺へ傾ぎ竹の秋
 竹の秋そろそろ老いの支度せむ
 水門へ土手真つ直ぐや草青む
 踏青やいつしか牧を一周す

易者の灯 笹本啓子

春の夜の易者の灯ほんやりと
 若芝を踏めば足裏に地の息吹
 先達は若き僧侶よ遍路道
 春の雲がばつと開く河馬の口
 孫悟空乗つて来るかも春の雲

春日傘 染谷風子

黒板に担任の顔山笑ふ
 切株に坐して竹笛山笑ふ
 剃り上げて法師のつもり四月馬鹿
 ふるさとの訛かすかに新社員
 古書市に探すモード誌春日傘

蝌蚪の瓶 石川理恵

耳塞ぎたくなる現し世に桜
諸葛菜の色を濃くして雨三日
知らぬ子が見せてくれたる蝌蚪の瓶
木の幹に人の貌あり春の闇
行く春や語り部たちの八十年

はるかなる音 曲淵徹雄

のどけしや下駄履きでゆく煎餅屋
はるかなる荒潮の音桜貝
岬縫ふトンネルの数山笑ふ
心字池を鯉の一擲春の闇
糸柳船宿へ入る割烹着

春は紅色 河野はるみ

朝の陽よほつぷすてつぷ麗けし
うらなる雲の流れを小半時
理系女子薄く紅ひき花の宴
道化師のほほは紅色糸桜
帰宅路の背中にそつと春灯

春の刻 越田栄子

鱒東風空に溶け込む水平線
街角の点字ブロック桜まじ
自転車の籠いつぱいに花ミモザ
助手席の話とぎれて春眠し
小さき手にミニカー握り春眠す

リラの雨 梅澤輝翠

松林抜くる銀輪春の蟬
リラの雨第二ボタンは鏡台に
若芝に寝ころび君と観る星座
先綾の袂に里の飛花落花
朝寝すや雨音しづか静かなり

春の駒 下川光子

さざ波のやうな人ごゑ春の宵
碁盤目の古都に色濃く花の雨
やはらかな風にハミング山笑ふ
神の杜抜けて晴れやか春の駒
声かくる遊びたがりの春の駒

新しい一步

寺内洋子

夢の跡なるや古城の花筏
入学す寺継ぐ決意新たに
制服に着られたやうや一年生
入学や昔はここに忠魂碑
組まれぬまま流されゆくや花筏

花まつり

鈴木玲子

米原を過ぎて名残りの雪しきり
黒板のエールとともに卒業す
瑠璃色の風の中ゆく卒業子
甘茶を三たび釈尊のつやつやと
春の日の古物市に万国旗

風光る

西幅公子

若芝に寝転ぶ丘やちぎれ雲
俳句の道の先師の軸や風光る
転がされ毛刈りの羊さるるまま
花筏海へ引つ張る亀の首
朝寝樂し夢は蔵王の春スキ

テラス席

石田慶子

花衣小走りに来るテラス席
鳥帰る戦無き空目指し行く
城崎の湯めぐりは下駄別れ霜
住職の配るあめ玉花祭
おにぎりにはらりふはりと桜散る

理想郷

宮崎チアキ

理想郷みなで造るや植樹祭
小揺ぎて光放つや春の草
昨夜の雨万象肥ゆる春の昼
うららかや交はす握手の温きこと
松蟬の声いつせいに間遠なる

信号は皆青

松島寛久

信号はみな青漁夫に春一番
春塵や王家を見るしスフィンクス
種蒔や今日は先祖の忌日かな
春塵に喝と見開く仁王の目
御仏を起こし若狭路春一番

妄語録

瀬戸 雄二郎

懺悔録 昼寝の枕より高し
備忘録さがしうろうろ春の昼
眠くなる 上方落語 春の宵
別れ話語尾はぐじやぐじや春行けり
蓮の音を聞かむと落語家不忍へ

花 筏

田中 章嘉

緋目高の恋の日差しに休みなし
早々と水やこ蠶は羽化し桜散る
花筏ぬつと顔出す鯉の口
桜狩遊覧船は墨田川
花筏過るふなをさ半被着て

春の夜

野平 美紗子

春の夜や起き出して読む亡夫の手紙
春の夜や月を仰ぎて家路かな
銭湯は今日も好調 春寒し
若芝に庭が丸ごと若返り
新卒の先生赴任 春半ば

薪 能

葛城 千世子

春の宵ことに激しき笛鼓
薪能面より出づる声太し
ぱちぱちと薪の匂ふ春の宵
狂言や皆笑ひだす春の宵
薪能終ゆペダルゆつくり花の中

春の虹

山戸 美子

大滝を過ぎて春の二重虹
帰路急ぐ木道先に春の虹
飛行機の眼下に円き春の虹
心臓を労りながら春の旅
若き日の謝意の気持や春の旅

花の城

高橋 満耶子

行く先は風におまかせ花筏
相棒の手押し車と花の城
手を引かれ稚児行列や花まつり
通学路を親と確かめ入学児
竿竹売りの「二本千円」春の風

春雷遠し

野村美子

春草を入れて葉書に手漉き和紙
春の昼寝転びながら犬と戯れ
軽快な草津の湯もみ春の夜
ミシン踏む春雷遠く聞こえたり
独り寝や春雷遠し夢の中

桜

綿貫ひさの

今はもう開かぬ橋や花筏
風に飛ぶ桜の名札直しけり
夜桜や少し雨降るコンサート
花吹雪音合はせする楽屋裏
八重桜重き荷を持つ帰り道

春ぬくし

森和子

山菜を分くる濡れ縁暖かし
カステラを分厚く切りて春ぬくし
暖かや吾にも小さき志
春愁ふ子には届かぬ母の声
春愁や話の長き見舞客

第24回俳句四季大賞

中村和弘「荊棘」

第13回俳句四季新人賞

山海和紀

第8回俳句四季新人奨励賞

有瀬こうこ・田中木江

第12回俳句四季特別賞

森田純一郎「街道」

受賞作品・選評・選考座談会を掲載
新人賞最終候補者発表

◎巻頭三句

対馬康子／堀本裕樹

鈴木太郎／鹿又英一

名取里美／辻村麻乃

◎今月の筆

内村恭子／拔井諒一

◎俳句と短歌の10作競歌

高勢祥子＋藤井柗太

◎今月のハイライト

「小熊座」創刊40周年

◎FENCOの私的選流

八田木枯……蘭草慶子

第25回「俳句四季」
全国俳句大会結果発表表

◎好評連載

成瀬政博
とりあえずの日々

筑紫馨井
俳壇編測

坂口昌弘
忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人
俳句の手触り、
俳人の響き

大西朋
俳句へのまなざし

井上泰至
俳句の詩語
イメージ辞典

神作研一
てのひらの江戸
―古典籍を旅する
高屋重三郎の手掛けた
本の四版を掲載

藤村公洋
俳句のつぼみ

堀田季何
諸家書架

二ノ宮一雄
一望百里



2025年7月号

6月20日発売
定価1100円(税込)

https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

各賞受賞者の言葉

新珠賞選考委員長
選考委員の評



俳句

7月号
予告

6月25日発売

予価 1,100円(本体1,000円)⑩

巻頭作品50句 西村和子

作品21句 岩淵喜代子・山口昭男

特集

水のさまざま

合評シンポジウム採録

怖い俳句

宮部みゆき×夏井いつき×
高野ムツオ×神野紗希

句集特集

福永法弘句集『永』

第59回 蛇笏賞 受賞第一作21句…三村純也

角川俳句賞作家の四季〈夏〉15句…若杉朋哉

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

水明賞 菅原卓郎



〔略歴〕昭和二十七年新潟県生。令和元年水明入会。令和二年同人。りんどう俳句会、俳句の手ほどき、水明熊谷句会、第一例会並びに円卓の会所属。現代俳句協会会員。

受賞のことば

三月十日は昼過ぎより某地において友人と小宴を張り千鳥足で帰宅しました。ふとスマホを見ると山本鬼之介主宰からのメッセージが入っており、「水明賞受賞おめでとう」と書かれています。何はさておき「有難うございます」と返信させて頂きました。水明賞の重さは予てより理解していたつもりですが、受賞の報に接しても、未だに実感がわいて参りません。水明賞を頂けるのは偏に山本鬼之介主宰をはじめとしますりんどう俳句会、俳句の手ほどき、熊谷句会、第一例会及び円卓の会の諸先輩方のご指導の賜物と思っております。水明集に投句を始めた頃は水明抄に名を連ねる事など考えもありませんでしたが、欠かさず投句し続けた事が良い結果に繋がったのではないかと思います。今後は大賞に恥じぬ様、日々精進に励んで参る所存です。最後に山本鬼之介主宰、水明の諸先輩方そして句友の皆様にご感謝申し上げます。有難うございました。

▼受賞対象句抄

可杯で享くる年酒の無礼講
陽炎のカーブに軋む花電車
鉄瓶の猛る湯玉や寒の明け
店番に寡黙なオウム四月馬鹿
短夜の名告る「白波」五人衆
花道を退くや六方夜半の夏
蹲踞をこぼるる水や処暑の夕
鰐口を「こん」とひと撞き空つ風
衣被剥いて差し出す賢婦人
旅一座葛籠に朴の欠け落葉

水明賞 新 曆文



〔略歴〕昭和十六年十月埼玉県
行田市生。

平成二十七年水明入会。平成
二十九年同人。令和三年新珠賞。
皐月の会・第四例会

受賞のことば

この度は水明賞と言う素晴らしい賞を頂く事が出来誠に
ありがとうございます。山本鬼之介主宰を初め選考委員の
皆さまに、改めて心より御礼申し上げます。又初めて一緒
に俳句を習った皐月の会の皆様、りそな句会の皆様第四例
会の皆様には本当にお世話になりありがとうございます。
昨年は人生初めて約四十日近く入院し健康の有難さを実
感しました。後何年生きられるか分かりませんが、元気の
内は俳句を続けて行きたいと思えます。

今年には俳句を始めた時に考えていた念願の句集を出す事
が出来、感無量です。

この受賞を機に、残された人生、もう少しだけ俳句を楽
しんで見たいと思います。

今後とも山本鬼之介主宰をはじめ、水明俳句会の皆様方
のご指導、ご交流を心よりお願い致します。

▼受賞対象句抄

不揃ひが競ふ香りや花梨の実
立冬や湯舟で伸ばすふくらはぎ
サツチモの声の掠れや山眠る
寒林の踏み入る先の瀬音かな
切腹の利休の無念寒つばき
海苔粗朶を隈なく染むる夕日かな
濃紺のスーツの折り目風光る
リハビリの杖は左手花菖蒲
病む夫に新涼と言ふ処方箋
桐の花火の見櫓のある役場

季音賞

河野はるみ



〔略歴〕昭和二十三年長崎県生。
平成十七年水明入会。十九年同人。
令和二年季音同人。第一例会。若松例会。第五例会。雛の会。めだか句会。現代俳句協会会員。

受賞のことば

「主宰より電話受け取る春の雷」
思いがけずも、受賞の報に浴し、声も出ない程。正しく春雷です。

日頃より鬼之介主宰の「はるみワールドでね」のお言葉を励みに、又月を副主宰の俳句は自分史でもあると言う事をお聴きし、俳句を詠む、言葉や諸を学ぶ楽しさが解る様になって来たところに、こんな瞬間が訪れるとは……ありがとうございます。これも偏に、鬼之介主宰、光二前主宰、月を副主宰、諸先輩、句友の皆様のご指導と励ましのお蔭と心より感謝し御礼申し上げます。又水明の世界へと誘なって頂いた小倉倭子様にあらためて感謝申し上げます。ありがとうございます。

今後とも鬼之介主宰をはじめ皆様方のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

春は曙だみ声で鳴く裏の鶏
坂道へ魚鼓の音散らす春の風
寄り添ふは石碑の根元一輪草
藤若葉房の容に垂るるや
蝸牛葉裏密談進行中
喜望峰越ゆるを夢見三尺寝
夕化粧母のにほひの遠からず
手のひらで風押し返す風の盆
村中の男が化粧ふ秋祭
月光に瘤包まれて冬木立

季音賞

曲淵徹雄



〔略歴〕昭和十八年富山県生。

平成十六年四月水明入会。

二十九年同人。令和四年水明賞。

第三例会。りんどう俳句会。新

樹の会。現代俳句協会会員。

受賞のことば

三月十日に山本鬼之介主宰より「季音賞受賞に決まりました。」という、思いがけないお知らせいただきました。主宰はじめ御指導いただいた先生、先輩、句友の皆様から御礼申し上げます。

八十路を迎えた昨年、脳梗塞で半月ほど入院し、その後アルコールを控えるにしてみました。お知らせをいただいた夜は旨酒を味わいました。

入院中の検査で、脳の血流が心もとない様子であることがわかりました。俳句を作ること、鑑賞することは脳の健康に良い働きがあると思います。また、句材を求めて歩くこと、本を読むことで脳を刺激するのも楽しみです。

俳句と太極拳を退職後に始めて、二十年になります。この道も続けることで新たな気づきがあるように思います。

これからも俳句を作り、句会を楽しみたいと願っています。皆様のご指導をよろしくお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

浮雲へ向かひ磴ふむ実朝忌
春浅し天地返しを待つ畑
朝桜仰ぎて眩む齡人
逃水の揺蕩うてゐる九段坂
走り終へ遠き眼差しダービー馬
玉垣を越す蚊柱の一踊り
雷遠く断髮式の大銀杏
寡黙なる床屋の主人熱帯魚
お局を偲び小江戸を秋日傘
赫灼と雲よせつけず冬の月

かな女賞

永野史代



〔略歴〕昭和二十一年八月埼玉県本庄市生。
昭和四十五年水明入会、四十八年同人。水明賞。六十五周年記念功労賞。珊瑚の会。鶴川山百合句会。ミモザの会。(元、柳、西新井)月の会。神奈川現俳青年句会。現代俳句協会会員。

受賞に思う

歳月

三月末の夜、主宰からお電話を頂いた。「かな女賞ですよ、おめでとー」と明るいお声、えつ、私？ どうしましょう！ 頭の中が真っ白で覚束無い。その日は高校野球とプロ野球の二本立てで私の応援しているチームが勝ってホッとしている所だった。こんな私でよいのかしら？ ただ水明に入って長いだけ（五十五年余）、何のお手伝いもしていませんのに……。恐縮するばかり。良いのですよ、と優しい主宰のお言葉。しどろもどろの受け答え。ありがとうございます、と謹んでお受けした。電話を切って、頭も体もふわふわ。仏前に賞の報告をしてやっとな落ち着いた。思えば二十代の頃俳画の長谷川久枝師に誘われて福岡穂郷、浪子師ご夫妻と出会う。柳句会（初吟行は岩槻）、藁の会（落合水尾のお誘い）、東仲町の発行所は夜で遠い為一度出席、凄いメンバーに秋子師が加わる。その後南浦和に住み、夫の研究と一緒に仏国へ行く事に。紙面の都合で続きは又の折に。今まで私を支えてくださった主宰はその意向を副主宰、編集長に伝え同意を得て下さった。主宰、諸先生、句会、句友、沢山の方向に深く感謝。今後ともどうぞ宜しくご指導をお願い申し上げます。

新珠賞 石関六弦



〔略歴〕昭和四十年埼玉県生。
令和四年水明入会。六年同人。
めだか句会。

受賞のことば

この度は令和七年度新珠賞を頂き、誠にありがとうございます。山本主宰、網野月を先生、選考委員会の皆様さらめだか句会の方々へ心より感謝申し上げます。水明創設九十五周年の節目の年に名誉ある賞に恵まれ、身に余る光栄です。

私は令和四年に幸いにも青木鶴城様より入会のお誘いを受け、以来めだか句会で句友と楽しみ共に励んでおります。日常発生する音や小さな音というのは、無意識の内に聴き逃しているものです。そういった「音」を拾いあげて句にしたら、と考えてテーマと致しました。

今回の受賞は私の俳句人生にとって大きな励みであり、今後この感動を忘れずに楽しく俳句を詠んで参りますので、引き続き皆様のご指導をお願い致します。

▼受賞対象句

音のある情景

朝霧へ一糸乱れぬ伝書鳩
鬼の子の衣こしらへ咀嚼音
秋晴の幾度も浴びて鼓笛隊
月明をまとひ鎮守の森に声
沈黙の両家ときをり鹿威し
カラヤンへすつと針置く夜半の秋
日だまりの玉砂利をゆく千歳飴
谷あひに下校の知らせ蜜柑山
湯豆腐や不意に娘の「ご報告」
風花やコンビニ包むモスキート
地吹雪のなか滑舌はさしすそ
凍星や骨伝導を聴く白鯨
二十五時の冬銀河より降る無音
除夜の鐘ときには鈍き音もゐる
岐路に立つ日のルーレット春隣

新珠賞 岡田宣子



〔略歴〕昭和二十五年新潟県生。
令和元年水明入会。令和三年同人。
令和六年鼓笛賞。第五例会。
蛸蚪の会。現代俳句協会会員。

受賞のことば

この度は令和七年度新珠賞を受賞させて頂きまして誠にありがとうございます。山本鬼之介主宰、網野月を副主宰、選考委員の皆様にご心より御礼申し上げます。

「はじめての俳句教室」の参加が切っ掛けで俳句をもっと勉強したいと思いつきました。水明に関わってから、先生方はじめ句友の方々と交流が年々増えて、それぞれの方から俳句は勿論、沢山の知識を学ばせて頂いている事が楽しみでもあり励みになっております。この賞は皆様のお蔭と深く感謝申し上げます。

応募句は拙いですが、「雪」に拘って雪景色の美しさと雪国に暮らす厳しさを詠んでみました。

まだまだ未熟ですが「作句・選句・鑑賞」の力を高めてゆけるよう精進致します。

主宰、副主宰、諸先生方、句友の皆様今後とも御指導の程宜しくお願い申し上げます。

▼受賞対象句

雪の降る町

新雪や踏むには惜しく煌めけり
雪原の小さき足跡追ふ心地
降る雪を仰ぎ騒立つ異国人
前を行く雁木の芸者お座敷へ
雪見障子に地酒は旨し越の宿
ぼた雪に見る見る沈む町明り
早晩の除雪車響き町目覚む
賑賑と落つる雫や軒水柱
明り取り深雪が塞ぎ隠れめく
雪国の定め思しき雪卸し
朝市の訛に和む六花
南行き屋根に積雪貨車過る
豊穰をもたらしいはれ雪解水
妙高山の雪形見よと指す農夫
雪国は忍耐強き人を生む

新珠賞

菅原卓郎



受賞のことば

〔略歴〕昭和二十七年新潟県生。令和元年水明入会。令和二年同人。りんどう俳句会、俳句の手ほどき、水明熊谷句会、第一例会並びに円卓の会所属。現代俳句協会会員。

この度は水明俳句会の登竜門であります新珠賞にご推挙頂きまして真にありがとうございます。山本鬼之介主宰より受賞のご連絡を頂きました。只々恐縮の至りです。新珠賞への応募は今回を含め三回目です。チャレンジの動機は句会の先輩の強い勧めです。挑戦しなければ成長しないよとの言葉を頂き応募を始めました。一回目、二回目の応募句を振り返って見直しますとかなり乱暴で独りよがりの句が目立ちます。今回は虚心坦懐にわかりやすい句作りに徹しました。誤字脱字等に気を付け、元々字を書く事が苦手でしたのでとにかく丁寧に書き、下手でもいいから見やすい字で書く事に務めて応募致しました。

山本鬼之介主宰、選考委員の皆様、句会の諸先輩の皆様並びに句友の皆様には感謝申し上げますと共に、今後も指導ご鞭撻の程、切にお願い致します。

▼受賞対象句

とりびあ

海境へ水脈のひとすぢ初茜
野仏にめをと遍路の片合掌
夕されの里の万灯火に忘れ雪
緑髪にかざす筭春日傘
陰膳に雪花菜の小鉢ぼけの花
山の端のかすむ遠嶺大夏野
学僧のそそと崩せり冷豆腐
十二様まつる背山の夏深し
清秋の棟梁うなる祝儀唄
可惜夜の急かぬ胡弓や風の盆
成金で挑む王手の良夜かな
糸底のゆがむ徳利や今年酒
灰均す寺の香炉の小春かな
片時雨よぎる町家に在釜札
崩し字の画賛したため寒見舞

鼓笛賞 反町 修



〔略歴〕昭和二十年群馬県生。
平成三十一年水明入会。令和三年同人。第四例会、新樹の会、芽吹句会、円卓の会。現代俳句協会会員。

▼受賞対象句

夏浅し富士の農鳥 踊るる
小さき苗 溺れさうなる 植田かな
マドンナに 遇ひてときめく 秋祭

受賞のことば

この度は鼓笛賞を賜りありがとうございます。水明に入会して初めての賞であり嬉しさは一入です。選考委員の皆様、御礼申し上げます。またご指導賜りました主宰、副主宰ならびに諸先輩、句友の皆様、感謝申し上げます。

この受賞を励みに更に研鑽を積み、俳句に精進したいと思えます。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

山紫賞

綿引まりこ



〔略歴〕昭和二十二年埼玉県生。
令和三年水明入会。令和五年同人。繭の会、りんどう俳句会、現代俳句協会会員。

▼受賞対象句

木槿の白棋士一瞬の蒼白
雁帰る 帰る場所なき 尋ね人
母の日や 遺品に父の恋文が

受賞のことば

三月二十八日癌との診断を受け、現実感のないまま退院致しました。

翌日の朝、網野月を先生より山紫賞受賞のお電話を頂き涙が止まりませんでした。

がんばれよと背中を押された気がします。

鬼之介主宰、月を先生、句友の皆様本当にありがとうございます。

この賞を励みに、命の続く限り俳句を楽しんでゆきたいと思っております。

あらたまの光

審査委員長 山本鬼之介

今年は二十三編の昨年を上回る応募があり、喜ばしいことでした。水明創刊95周年という上げ潮ムードも影響したかと思いますが、各句会の指導者と幹事並びに先輩方からの俳句歴の浅い新人の方々への積極的な声掛けが功を奏したのではないかと思います。またそれと同時に、実力派と目される会員の応募があつたことも大変嬉しいことです。

数年前から新人の多い句会を中心に、新珠賞への応募を積極的に呼びかけてきた効果が定着してきたように思われますので、今後もうこうした地道な努力を、句会の指導者や幹事、そして、俳句の先輩諸氏に続けていただくことを切にお願いする次第です。

さて、今年の審査結果は五月号で既報の通りですが、各作品に目を通して、「誤字・脱字・送り仮名・旧仮名遣いなど、基本的な誤りが無いように」と、審査委員長として注意を呼びかけてきた効果が顕れてきたように感じられ嬉しく思いました。

◆応募において注意すべきこと

- ①文字は一字一字心を込めて丁寧を書く。●癖字に注意。
- ②誤字・脱字を皆無にする。●辞書で充分確認。

- ③送り仮名や旧仮名遣いを正しく表記する。●辞書で確認。
 - ④季語の配列を考慮する。●各季節が入り混じらないこと。
 - ⑤題名を熟考すること。●作品と同様に題名が大事。作品十五句の雰囲気に対応しい題名を熟考すること。
- 来年応募する方は、この五箇条を心に留めてください。

〔石関六弦「音のある情景」〕

筆者が審査委員の一人として第一次審査で選んだ五作品の中の一つで、受賞が決まり嬉しかった。心からお祝いを申し上げる。作品十五句にある個別の音を、委員各位の耳に聴覚として届ける俳句の技が素晴らしい。俳句も然る事ながら題名が実に佳い。タイトルが作品群の特徴を上手く捉えており、受賞に大きく貢献したと言えるだろう。

朝霧へ一糸乱れぬ伝書鳩

月明をまとひ鎮守の森に声

カラヤンへすつと針置く夜半の秋

谷あひに下校の知らせ蜜柑山

湯豆腐や不意に娘の「ご報告」

一つ一つ納得のゆく音音音……である。

〔岡田宣子「雪の降る町」〕

筆者が第一次審査に選んだ五作品の中で、最高の三点を付けた作品である。作者の出身地が舞台になっていると思われる作品であり、実体験を平易な言葉で綴った作品が、映像と

なつて届いた。銜のない作者の素直な心が、一句一句に投
影されている。高英男の歌「雪のふる町を」を髣髴させる。

前に行く雁木の芸者お座敷へ

雪見障子に地酒は旨し越の宿

ぼた雪に見る見る沈む町明り

早暁の除雪車響き町目覚む

朝市の訛に和む六花

今年の冬、作者の故郷はさぞかし厳しい雪に見舞われたこ
とだと思う。

菅原卓郎「とりびあ」

前作品と同様に、第一次審査で最高点を付けた作品である。
先ず特徴のあるのが題名で、審査会に於いても組上に載せら
れた。辞書の解説から推理すれば、この題名が言わんとする
ことは「謙遜」と受け取れるが、見方を変えれば「挑戦」と
も受け取れる。題名の平仮名表記から推し量つても、受賞に
むけての並々ならぬ意気込みが見えてくる。

夕されの里の万灯火に忘れ雪

緑髪にかざす笄春日傘

十二様まつる背山の夏深し

可惜夜の急かぬ胡弓や風の盆

糸底のゆがむ徳利や今年酒

昨年の作品に見られた荒削りの傾向が改善され、学習の成
果が確認できた。

◆筆者が第一次審査で入っていた題名「水のある風景」と
「観る者の無き」は、残念ながら第二次審査で落とされた。
◆受賞作品以外の二十作品からそれぞれ一句を選び、来年
の応募を待ち望む筆者の気持の証としたい。

水温む届け吾のセロ「鳥の歌」

風筋の真つ直ぐ来たり春一番

古雛や早く飾れと目で合図

チヨークの品書きビストロは寒燈

冬三日月や一番星をそつと抱き

道端の祠も留守や神の旅

総身を深雪へ委ぬ茜空

逢引の径あり杜の芽吹き時

稜線や開く眺望東風吹ける

乳を遣る子連れダンサー秋簾

露刈るや溢るる水の輝ける

出航の帆船染むる冬落暉

蠅座の男が俳句山笑ふ

源流を辿りて春の水ひとつ

人形に性格のあり春愁

風花や狛犬の阿に踊り入る

独り夜や鍵の穴から虫の声

ひとり野に空を仰げば鳥曇
看板の文字踊り出す酷暑かな
きみどりを選りて菜花の三の膳

榎本道代

香田裕誌

南條さわゑ

田中弘子

平野 楽

三浦真由美

皆川更穂

秋谷風舎

前田夏野

森下山菜

石井直子

反町 修

飯田忠男

播磨 進

吉川 拓真

石黒由美子

綿引まりこ

小山あつ子
椎名泰子
中村留美子

選評 網野月を

今年の応募作品は二十三作品が揃った。各十五句には、真摯に作句されたものが多くみられ、楽しい句も散見されて全体的に好印象であった。掲題においてはもう一工夫欲しいものも見受けられた。

各地区委員を含むと十三名の選考委員の第一回目の投票によつて「音のある情景」「水精」「雪の降る町」「少年の日の忘れもの」「とりびあ」の五作品が選考の対象となった。

その中で受賞作の三作品は、十五句の構成は元より、推敲を重ねた句、句意のオリジナリティーの際立った句、叙情を前面に押し出した句などがあつて、掲題にもマッチした作品となつていた。受賞作品の中から秀逸と筆者が考える句を揚げて鑑賞します。

谷あひに下校の知らせ蜜柑山

石関六弦

湯豆腐や不意に娘の「ご報告」

風花やコンビニ包むモスキート

地吹雪のなか滑舌はさしすせそ

二十五時の冬銀河より降る無音

題の「音のある情景」に因んだ十五句が揃つていて、中でも筆者が特出した五句を選んでみた。何れも句意、構成、語彙の質感の秀逸さが目立つ。五句目の「無音」は、掲題と照らすとある意味でパラドクスではあるのだが、その裏付け

があつてこそその作者の「音のある情景」なのであると思う。

新雪や踏むには惜しく煌めけり

岡田宣子

雪見障子に地酒は旨し越の宿

朝市の訛に和む六花

豊穰をもたらしいはれ雪解水

想像するに題の「雪の降る町」は作者の故郷なのであるまいか。作者ご自身の原風景を詳らかにそして丁寧に叙景している。が、「踏むには」「旨し」「和む」というように作者の微細な心の動きも盛り込まれている抒情も感じ取れるのである。「いはれ」は作者自身の感傷を超えて雪国に暮らす人々の願いが込められている。

第一句目は、上五に「や」の切れ字を用いて主語の呈示をしている。座五の「煌めけり」は「煌めく」の命令形「煌めけ」に完了の助動詞「り」を配したもので、より客観的な叙景を強調するとともに完了した状態の継続を示している。つまり「煌めき続けている」という意味合いになるであろう。

十二様まつる背山の夏深し

菅原卓郎

成金で挑む王手の良夜かな

糸底のゆがむ徳利や今年酒

片時雨よぎる町家に在釜札

「とりびあ」の題は意表を突いていた。このような設定の十五句を詠ませてもらえらるとは幸せである。何れの句もアイディアの横溢した句で読み応え十分である。切れ字の用法、リズム感、いずれも秀逸である。

おめでとう

大村節代

あらかじめ選者に送られた二十三の応募作品を、読んで迷いに迷いました。何れの作品にも、きらりと光る句があります。思い切って選びました。

新珠賞選考会にそれぞれ推薦作品を秘めた選者が集まり、地区委員評価も加わり、次の三名に決定しました。石関六弦、岡田宣子、菅原卓郎のお三方には心からお祝申し上げます。

○「音のある風景」

朝霧へ一糸乱れぬ伝書鳩

石関六弦

カラヤンへすつと針置く夜半の秋

湯豆腐や不意に娘の「ご報告」

伝書鳩からカラヤンへ、各々の句の自在さに感心しました。三句目の中七「不意に娘の」により、好きな人が、結婚したい人と言う娘の「ご報告」に作者の驚く様子が伝わります。

○「雪の降る町」

雪見障子に地酒は旨し越の宿

岡田宣子

早暁の除雪車響き町目覚む

南行き屋根に積雪貨車過る

作者は雪国のお生まれなのでしょう。か。「雪」の句で十五句がまとまっていて、雪国の大変さを垣間見た思いです。

○「とりびあ」

海境へ水脈のひとすぢ初菫

糸底のゆがむ徳利や今年酒

崩し字の画賛したため寒見舞

季語の斡旋がとても良く、どの句にも「とりびあ」感を感じて、情景が浮かび、無理なく伝わります。

今年度、受賞されなかった方は、再度のご挑戦をお待ちしています。次は応募された作品の中で印象に残った作品です。

○「水温む」

沼に映ゆメタセコイヤの背くらべ

榎本道代

常日頃見慣れた景をやさしい目差で作句。来年も近景をさらに深く詠んで頂きたいと思えます。

○「四季追憶」

風揚げる技に高さの違いあり

香田裕誌

作者と一緒に四季を追憶しました。季節に前後があるのが見受けられ残念です。

○「飛び立つ君へ」

春浅し八十路の道は楽しかりけり

南條きわゑ

新珠賞が決定し、お名前の公表がありました。ベテランが新珠賞に挑戦、その心意気に感動しました。

○「ビストロ」

初競りやマグロの鰹より東北弁

田中弘子

ビストロの題名に相応しい句の数々、各々の句が響き合ひ共鳴しています。

新進気鋭

青木鶴城

先ず今年度の新珠賞を受賞された石関六弦、岡田宣子、菅原卓郎のお三方に心よりお祝い申し上げます。

令和七年度は二十三作品からの選考となったが、今年度の作品も其々工夫を凝らして練り上げられ、クオリティーの高さが感じられた。特に受賞の三作品は突出するものであった。

『音のある情景』石関六弦

カラヤンへすつと針置く夜半の秋

湯豆腐や不意に娘の「ご報告」

風花やコンビニ包むモスキーと

音をテーマにした作品。朝霧の中の伝書鳩の羽ばたく音から、最後はルーレットが回る音の中での緊張感まで様々な音を想像させる構成は見事である。カラヤンの句は、静かな夜のレコード盤に針を置く仕草と共にジーと始まる音がそこに存在する。湯豆腐の句は、「お父さん実はね……」が聞こえてくる。風花の句は、「モスキー」がキー。若者には聞こえるが高齢者には聞こえない高周波音が巧みに仕込まれている。

『雪の降る町』岡田宣子

新雪や踏むには惜しく焔めけり

賑賑と落つる雫や軒氷柱

朝市の訛りに和む六花

雪国をテーマにした作品で、雪国育ちの作者ならではの雪に対する感性が伺える。新雪の句、雪国では雪は珍しいものではないのに、焔めく新雪はやはり特別なのであろう。軒氷柱の句は臨場感が生きた。朝市の句は六花（むつのはな）の表現が句のクオリティーを高めた。

『とりびあ』菅原卓郎

可惜夜の急かぬ胡弓や風の盆

片時雨よぎる町家に在釜札

崩し字の画賛したため寒見舞

先ず題名に惹かれた。読んでみると成る程一句一句にトリビアが仕込まれていて楽しめた作品。可惜夜は明けてしまうのが惜しい夜。在釜札は茶会が催されていることを示す札。画賛は絵の上部や余白に書き加える文。

残念ながら受賞は逃がしたものの、特に印象に残った句を下記に紹介する。来年の作品に期待したい。

鍵盤にドガの踊り子春の風

待宵の心遊ばすペンの先

碧き樹々深くしづもる白夜かな

ひたひたと月光は地を潤せり

草陰にかそけく灯す姫螢

身の丈の大根引く子天仰ぐ

きみどりを選りて菜花の三の膳

垂るる実の色つき待つや庭蜜柑

綿引まりこ

〃

小山あつ子

〃

椎名泰子

〃

中村留美子

〃

飛躍 石井喜恵

寒暖差の激しい日々の中、昨年にも増して二十三編の応募作品があった。各々の作者の思いのこもった作品を前に、真摯に向き合い選に臨んだ。受賞された石関六弦、岡田宣子、菅原卓郎の三氏の方々ほんとうにおめでとうございます。

「音のある情景」 石関六弦

沈黙の両家ときをり鹿威士

カラヤンへすつと針置く夜半の秋

日だまりの玉砂利をゆく千歳館

湯豆腐や不意に娘の「ご報告」

沈黙の両家の首尾は如何に。俳諧味ある楽しい各々の句から、作者の聞いている音が読者にも聞こえてくる。作句に選んだ言葉は易しいが、鮮やかに心に響くのである。

「雪の降る町」 岡田宣子

新雪や踏むには惜しく煌めけり

早暁の除雪車響き町目覚む

賑賑と落つる雫や軒氷柱

朝市の訛に和む六花

雪国育ちの作者ならではの実生活の句が並ぶ。目覚めは小鳥の声ならぬ除雪車の響きとか。雪国の日常を銜うことなく切り取って詠んだ作句に好印象を持った。

「とりびあ」 菅原卓郎

海境へ水脈のひとすぢ初茜

陰膳に雪花菜の小鉢ほけの花

可惜夜の急かぬ胡弓や風の盆

糸底のゆがむ徳利や今年酒

すでに完成された言葉遊びで一句一句が独立している。題名の「とりびあ」にも工夫があり、手練れの作句である。

次回に期待する作者

「春兆す」

薄氷や胸に閉ぢ込込む痛みあり

白きキー触る指先に春日影

誰にも覚えのありそうな心象の効いた句である。

「少年の日の忘れもの」

朧夜の渚に拾ふ金釧

河鹿笛少年の日の忘れもの

句の題材が多岐にわたり作者の少年時代を彷彿とさせた。

「大空へ」

干梅の天地を返す一つづつ

朝一番日除大きく広げけり

天地を返すの措辞に梅干の手作りの情景を活写している。

「冬を生きる」

階下より琴の調べや賀状書く

老妻の小さき声なり福は内

作者の家庭の穏やかな日常の佇まいに好感を持った。

珠を磨く 石山かつ子

令和七年度新珠賞が決定致しました。選考委員会に於いて
厳重な討論の結果 石関六弦・岡田宣子・菅原卓郎 三氏に
決まりました。心よりお祝申し上げます。又二十三名の各々
の氏が力を込めて十五句をそろへ新珠賞に挑戦されたことに
拍手を送ります。

「音のある情景」

石関六弦

鬼の子の衣こしらへ咀嚼音

日だまりに玉砂利をゆく千歳飴

谷あひに下校の知らせ蜜柑山

除夜の鐘ときには鈍き音もして

日常の生活の中に心をそそぎその音に集中して句全体には
のぼるとした味があります。写生がよくきいていて、とても
配慮のある方と推察致しました。

「雪の降る町」

岡田宣子

ぼた雪に見る見る沈む町明り

賑賑と落つる雫や軒水柱

朝市の訛に和む六花

明り取り深雪が塞ぎ隠れめく

雪の降り始めから雪解までの雪国の生活を一気に俳句に詠
まれた様子が十五句の中に込められています。地球温暖化と
はいえ人々の冬は大変厳しいです。

「とりびあ」

菅原卓郎

山の端のかすむ遠嶺大夏野

十二様まつる背山の夏深し

可惜夜の急かぬ胡弓や風の盆

糸底のゆがむ徳利や今年酒

言葉が飛び跳ねているような句の中に光った句があります。

「トリビア」とは些細なこと。くだらないこと、雑学的知識
とありました。私はこの「雑学的知識」と理解して十五句を
詠ませていただきました。

受賞には到らなかつたけれど、感銘を受けた作品。来年度
も又、新珠賞を期待致しています。

競漕やオールの切りし川水面

平野 楽

数多なる南天の実に願ひ事

トラクター傾いてをり昼の月

三浦真由美

鉄塔も木立も遠く霾れり

初明りののちの色の荒磯海

皆川更穂

山崩す滾りの響動む雪解川

慰霊碑を洗ふがごとき落花かな

秋谷風舎

遠近に手締の音や酉の市

言葉との格闘技 日高道を

令和七年度の新珠賞には二十三名の応募がありました。新珠賞は水明の他の結社賞と違い応募作品一五句の絶対評価で受賞が決定されます。その為にはまずは応募しなくては始まりません。

今回見事に受賞された石関六弦、岡田宣子、菅原卓郎の三方には心よりお祝い申し上げます。また今回は残念ながら受賞に至らなかった皆さんも、また挑戦を躊躇っている方も、是非来年を目指して頂きたいと思えます。

「音のある情景」

石関六弦

題名の通り、作者の身の周りにある微かな音を題材にとらえた作品が揃っていて、作品に作者の存在がみえます。

朝霧へ一糸乱れぬ伝書鳩

カラヤンへすつと針置く夜半の秋

日だまりの玉砂利をゆく千歳飴

凍星や骨伝導を聴く白鯨

二十五時の冬銀河より降る無音

等の句は特に幽かな音を上手に拾い上げ叙景して良句となっています。

今後さらに精進されることを期待しております。

「雪の降る町」

岡田宣子

十五句を通じて作者の出身地であろう雪国の日常が上手に切り取られており、一つ一つの作品に作者の目の当たりにし

た映像を共感することが出来ます。

新雪や踏むには惜しく煌めけり

ぼた雪に見る見る沈む町明り

早暁の除雪車響き町目覚む

朝市の訛に和む六花

等の作品には特にそれを感じ取れる作品となっています。作者の奇をてらわれない俳句作りをこれからも続けていただきたいと思えます。

「とりびあ」

菅原卓郎

句の内容、措辞が巧みで、よくまとまった作品となっています。

海境へ水脈のひとすぢ初菫

夕されの里の万灯火の忘れ雪

片時雨よぎる町家に在釜札

他にも作者の知識と教養の高さを感じられる秀句が揃っています。

今後のご活躍を大いに期待したいと思います。

その他の印象に残った句から

全天の光を纏ふ天狼星

源流を辿りて春の水ひとつ

観る者の無き天顔の冬の月

勝ち牛を洗ふ島人鰯雲

飯田忠男

播磨進

吉川拓真

石黒由美子

是非来年も継続して挑戦していただきたいと思えます。皆さん各々のスタイルで「言葉との格闘技」を苦しみ、そして楽しみましょう。

推薦委員寸評より

○大橋迪代

「音のある情景」 石関六弦

テーマがユニークで魅力的。

朝霧へ一糸乱れぬ伝書鳩

カラヤンへすつと針置く夜半の秋

凍星や骨伝導を聴く白鯨

「秋冬記」 石黒由美子

的確な写真と音、韻文のリズムが心地よい。

勝ち牛を洗ふ島人鱈雲

夕風にリヤマの群れ行く大枯野

蒼天やポインセチアの出荷の日

○檜鼻ことは

「少年の日の忘れもの」 森下山菜

どの句も澁刺として小気味の良い措辞、意表をつく切り口と取り合せに妙に感じ入りました。

「農ある暮らしの四季」 中村留美子

農業を営む作者の一年の暮らしぶりが、鮮やかにそして生き生きと詠まれています。

○永野史代

「音のある情景」 石関六弦

音が流れている句たち。

カラヤンへすつと針置く夜半の秋

風花やコンビニ包むモスキート

二十五時の冬銀河より降る無音

「ビストロ」 田中弘子

ビストロにふさわしい句数多。

初競りやマグロの鰓より東北弁

献上の枇杷捨てられぬ種三つ

手の甲で味見する癖除夜の鐘

○五明 昇

「とりびあ」 菅原卓郎

一句ごとに内容があり、季語の選択、措辞の使い方も巧み。「海坂」「万灯火」「雪花菜」「在釜札」などの言葉散りばめ格調も高い。

「秋冬記」 石黒由美子

題名の通り、国内外の秋から冬にかけての情景を平易に詠み上げている。季語と素材の取合わせ、配列も的確で、文字もきれいで好感が持てる。

新珠賞秀句鑑賞

網野月を

新珠賞応募作品から秀句と思われるもの、ならびに筆者の感銘を受けた句を鑑賞する。並びは選考時の作品に付された番号順である。

水温む自然織りなすダイヤかな 榎本道代

水の輝きがダイヤの輝きに似ているということであろう。自然の業であるという意味づけをしているのだが、その発見は慧眼である。

老と児の素顔真顔の盆踊り 香田裕誌

男女は元よりであろうが、老いも若きも打ち揃うことを超えて、児たちの参加する盆踊りは、社会の未来を感じさせるものがある。「素顔真顔」の丁寧な描写が功を奏している。

留学生笑顔で送る春帽子 南條きわゑ

座五の季語「春帽子」は人物を表現している。留学生たちを見送るその人物の属性がそこはかとなく理解できるように思う。加えて留学生と春帽子の人物との関係性も表現している。

手の甲で味見する癖除夜の鐘 田中弘子

年が詰まっておせち料理を作っている景であろうか。上五中七の句意がよく分かる。座五の季語が時間の経過と句意を担保している。だれかの癖を見守っているのか、自分の癖に

はたと気づいたのであるうか。

遠雷に犬しやんと主を守らむと 平野 楽

本来、犬は雷に怯えるようであるが、この犬は主を守るために「しやんと」しているのである。ある意味発見なのであるが、意外性の句意が遠雷の季語の生み出した光景である。

西空背負ひて黒き冬木かな 三浦真由美

秀筆である。逆光で影絵のようになっている冬木は、それでも西空を背負っていて、古びた仏像が後光に包まれているようになっているのである。

古里の容を纏ふ雪の花 皆川更穂

「容を」である。「容に」でもなければ、「容の」でもないのである。兎も角も、雪景色に古里を感じている作者の視線を読み取ることができる。簡潔な叙述に俳句本来の潔さを感じる。

遠近に手締め德音や西の市 秋谷風舎

熊手市の景気の良い有様が手に取るように叙景されている。叙景句と理解してもよいかも知れないが、遠近の措辞から作者がその景の中に存在しているのが分かる。

薄氷や草閉ぢ込めて描く落書 前田夏野

座五の落書の措辞まで持つて行ったところが句の奥行きを深めたと思う。上五の切れ字は簡単でも主語の呈示でもなくて、句の設えを準備する役を果たしているかと考える。

乳を遣る子連れダンサー秋簾 森下山菜

意外性を超えてシュールな感覚さえ覚える。秋簾越しにダ

ンサーの影を認めたのである。よく見ると授乳しているのがある。ハツとして目のやり場に困っている作者を想像して苦笑してしまった。

近寄れば遠のく猫や芙美子の忌 石井直子

猫の本質を言い当てている。一定の距離を取りながら、時々振り向くそぶりを見せる猫への作者の思いが複層的に表現されている。季語の斡旋が効いている。

クリスマス登舷札のプラモデル 反町 修

貴賓の送迎、出征などの際に行われるのが登舷札である。艦艇の最も華やかな姿の一つである。プレゼントを贈られた子の多分誇らしげな顔が思い浮かぶようである。季語の斡旋が秀逸であり、想像を無限に拡げてくれている。

ポラリスは我慢の星よ冴返る 飯田忠男

孤高のポラリス、つまり北極星について、作者は何らかの思い入れがあるのである。我慢と言いつつ北極星へエールを送っているようである。

早朝の河原に揺れる蛇の衣 播磨 進

子どもの頃の思い出の景でしょうか。それとも作者の昨今でしょうか。叙景句であるのだが、読み手はどうしても早朝に河原にいる作者を想像する。句中の作者をである。

かの蜂は己の翅に震へるか 吉川拓真

前衛俳句の匂いがする。しかしながら一句仕立てになっている分、句の解釈は読み手に委ねられている。筆者は蜂に特定の人物を当てて詠んでいる。

顔見世の幕間弁当鯛の飯 石黒由美子

十一月の歌舞伎座でしょうか。歌舞伎の世界では年の初めに相当する顔見世でしょう。弁当にまで目出度さを演出しているのでしょうか。

沈黙の森夏鶯の遠音 綿引まりこ

句跨りというよりも、破調のリズムと言った方がよいだろう。このリズムの緊張感が鶯の透明感のある遠音を想像させ、導き出している。秀抜である。

寒星の満つるこの夜を慈しむ 小山あつ子

星空を見上げている作者がいる。座五の措辞から句中にも作者が厳然と存在している。一句仕立てにすることで散文の仕立てになっているが、清音ばかりの綴りが寒星の美しさを語っているようである。

追憶の褪する日はなし天の河 椎名泰子

褪せることのない思い出ということであり、甘酸っぱい思い出、鮮烈な思い出といるいろに解釈できるだろう。鬼籍に入られた人への追慕のようにも解釈できるだろう。

アーモンドの花咲く庭となりけり 中村留美子

作者はアーモンドということを知っているのである。もしも作者ご自身の庭でないとすれば、作者は花に詳しい方なのではあるまいか。ついアーモンドの花の香を思い出してしまう。

以上、舌足らずではありますが、鑑賞させていただきました。

『水明誌』を繙く（水明四月号）

友定洸太（「傍点」同人、
「E.O.」詩友）

岬廻の風哭くところ水仙花 荒井俱子

一面に水仙の花が広がる海辺の絶景が凝縮された一句です。「風哭く」という表現から草木を大きく揺らす激しい海風が想像されました。眼下に打ち寄せる波や、崖の荒々しい岩肌も見えてきます。厳しい環境でエネルギーを蓄積している水仙に寄せた思いが伝わってきます。「岬廻」とは、岬のまわりといった意味で、万葉集に登場する言葉だそうです。この一語が一句を格調高くしています。

作者がどこの岬を書かれたのかは存じ上げませんが、もし現代の水仙の名所に取材されたのであるなら、きっとそこは観光地として整備されていたことと思います。しかし、作者は万葉の時代にも通じる岬の本質的な荒々しさを感じ取り、的確な表現で描き出しています。

岬を巡ったあと、人は帰ります。一方、水仙はそこに居続けます。岬に根づく水仙に何か言葉を残しておきたいという切実な思いが感じられた作品です。

同時作（ナースよりパレンタインの日の注射）のユーモアにも惹かれました。

梅林へほいしよほいしよの二十段 綿貫ひさの

息を切らして石段を一つ一つ上がっていかれる様子がありありと目に浮かびました。「ほいしよほいしよ」というオリジナルな表現に心を掴まれます。普通なら「よいしよ」と書くところ、「ほいしよ」だからこそ息遣いが伝わってきます。テンポよく進んでいるようにも感じられました。

この方は石段のどのあたりにいらっしゃるのでしょうか。私は十五段目あたりを想像しています。というのは、「ほいしよほいしよ」の声は最初の数段ではなかなか出てこないと思うからです。また、「梅林へ」とあることから、まだ上りきっているわけではないと読みました。この方にはもう梅林が見えかけているのではないのでしょうか。

寒さの厳しい二月、梅の見頃を楽しみに軽快な調子で石段を上っていかれる足取りがなんと春らしいです。桜並木と比べて、梅林は小高いところにある印象があり、私自身の実感にもしっくりきました。

身体から出たありのままの言葉が保存された素敵なお句です。

現代俳句鑑賞

網野月を

からくりの茶坊主びたと春の昼

山本鬼之介

〔俳句四季〕4月号・巻頭句より〕

茶会にあつて、「からくり」仕掛けの木の人形が、「茶坊主」となつて、亭主から託された茶碗を客まで運ぶ趣向が行われている、ということであろう。目当ての客の前で「びたと」と止まつて、「からくりの茶坊主」は見事な演出を全うしたという訳である。このすべてを座五の季語「春の昼」の中に置いて、句の品格まで高まつている。

白木槿は翳りの中にひらきたる

雨宮きぬよ

〔俳句界〕4月号・新作巻頭より〕

文字通り「一日の栄」である「白木槿」であるが、加えて「翳りの中に」と咲くところを示して、槿花の本質を言い切っている。この本質は実景よりもより真実に近いように考える。他に「春の山大きな窓に置いてみる」がある。

鳥雲に海図の明り消しにけり

西山 睦

〔俳壇〕4月号・遠くの空より〕

「海図」を照らす明りを消して、いよいよ旅立ちを決意した心境を描写しているように解した。上五の「鳥雲に」の季語を頼りに解釈したのだが、作者はより深い意味合いを込めているのかも知れない。他に「ぶらんこの遠くの空へ胸張つて」がある。

声かけて声かけられて交わす花

中内亮玄

〔俳壇〕4月号・悠久浪漫より〕

敦賀市金ヶ崎町の金崎宮での花換祭を詠んでいる。景を素直に描写することで、奥行きのある神事を清廉に描写しようとしている。神事の由縁についても、彼の地の歴史的背景についても作者がエッセイを寄せていて、その風体がよく理解できる。

ゲート座の角で回しぬ春日傘

藤田直子

〔句誌〕秋麗〕4月号・みぎはまでより〕

横浜の港の見える丘公園への道筋にある「ゲート座」のことであろう。座五の季語「春日傘」が秀逸の斡旋である。むろん実景なのであるが、「春日傘」に拠つて全ての景が克

明に想像できる。他に「海に浮かべむ異人墓の落椿」がある。

輪唱的に陽炎を抜け我を出る

(句誌「山河」393号・半ドアより)

山本敏幸

上五の「輪唱的」をどのように解するのか、つまり読者の鑑賞に委ねられているところである。筆者は何度も何度も陽炎を抜け出ようと試みた、と解した。「我を出る」についても同様で、筆者は「我に返る」と解した。それにしても「輪唱風」ならば直ぐに分かるのだが、「輪唱的」と言い切っているのは初めてである。他に「半ドアの左脳を洗う初明り」がある。

透明な息して涅槃図を見たり

(句誌「陸」4月号・日暮より)

大石雄鬼

難解な句が多い作家であるように考えている。筆者にとつてではあるのだが、この句の場合は「透明な息」が句の肝であろう。息を殺して見ているとも、敬虔な心になって見ているとも解せる。解釈は文字通り読み手に託しつつ、行動を説明するのではなく、具体的なものを「透明な息」によって描出している。他に「前日の私起されば小鳥引く」がある。

春なのに素知らぬ顔のマグノリア

(句誌「形象」538号・形象作品より)

北郷萌祥

「マグノリア」の崇高さを「素知らぬ」と評したのである。もしくは威厳の高さを楚々とした咲きっぷりに託したの

であろう。上五の「春なのに」に作者の感慨が表出されている。

花びらのように魚削ぐ夕時雨

(句誌「雨車」3月号・痛点より)

三浦文子

冊にした魚身を刺身にしている景であろうか、それともその刺身を皿に盛る景であろうか。筆者は前者のように解釈して、作者自らの薄造りの手際の見事さに、満足している作者の顔を想像してみた。たぶん白身の魚であろう。他に「痛点につかずはなれず秋の蝶」がある。

凧や句碑その上の月静か

蒲公英の絮ひと吹きし退職す

全快の膳に二対のさくらんぼ

(句集「曆文三百六十五句」より)

新 曆文

今年三月に上梓された句集から三句を取り上げる。

一句目は「凧」の中、句碑の上上がった月の「静か」さを詠んでいる。「静か」の部分に僅かだけ作者の視線が感じられ、作者在中の句となっている。二句目は「退職」の句であり、筆者の共感するところである。上五中七の「蒲公英の絮ひと吹きし」は実際の事柄であるが、何かを無意識にしましそうな人間性の性のようなものをも感じる。三句目は、長い闘病を終えたときの心持ちを、鮮やかな「さくらんぼ」の色合いに託している。しかも「二対」になっているのである。闘病を支えてくれた周囲の方々との絆のようなものが、そこはかとなく表現されているように思われる。

山本鬼之介 選

水明集

寒明けや太極拳の裾揺れて
春浅しシヤベル戸口に並ぶ街
春浅し千鳥の遊ぶ横須賀港
夕東風や船出見送る万国旗
春や羽衣摺り足の妙晴れ舞台

さいたま 寺町知子

解体の昭和の官舎春寒し
鋤くたびに新たな匂ひ春の土
一声の一斉になる百千鳥

小林京子

薄霞十七文字に誤字脱字
啓蟄や介護施設の落成す

三陸の海を賑はす夕燕
湘南電車ぐんと南へ春を見に
吾子の如やがて飛び立つ蒲公英よ
甘やかな風の案内や青き踏む
裸婦像や春風まとふ幾重にも
一陣の風に微笑む黄水仙
黄水仙遙かに白帆沖を行く
春雷に身じろぐやうな城の鯨
津軽富士望み城下は桜どき
霾や来たる友好雑伎団
風光る色とりどりの熱気球
銀ぶらや春爛漫の飾り窓
梅林や幟はためく陶器市
逆縁の墓にささやく春の星
落椿波紋広がる神の池
うららかやスマホで地球散歩かな
三月やジャングルジムに分け入る子
三月の海の流木しろじろと
菓子折の花びらの音春彼岸
大石忌小雨に濡るる南部坂

さいたま 菅原真理

岡田宣子

反町 修

越谷 阿部幸代

杉の花耳鼻科の医師の垂れ眉毛
丁子の香シリア駐在長き家
卒業のカーテン閉づる美術室
音の無きわたくし雨よさくらがひ
初蝶来確定申告の列に

さいたま 森下山菜

女坂あると知りつつ梅見坂
梅見茶屋覗き小さき菓子の色
白梅や合格祝ひの甘酒と
太鼓部の小学生や花の兄
群衆は太鼓の音と梅の中

さいたま 吉川拓真

黒雲を見遣る船長春疾風
畑打や私雨の箱根山
道標のたもとに忍ぶ葦草
美濃焼の小鉢に光る春菜かな
墓に留まる紋白蝶に合掌す

皆川更穂

星おぼろ指きりげんまん響く辻
抽斗にあの時の鍵なごり雪
春寒しピアニシモなる星の音
ハンガーを脚へし鴉春の空
星降るや備長炭の軽き音

田中弘子

床の間に香薫き込めて大石忌
尺八の歌口濡るる大石忌
球乗りのピエロの涙春なかば
三月や朝のルーチン遅れざみ
あの男奇妙奇天烈春嵐

飯田忠男

古寺の千社札剥ぐ春疾風
春疾風火影荒ぶる隅田川
初蝶や下校の子等の先立ちに
少女らの手に初葦匂やかに
美濃絹の淡きひかりや花衣

霜多光代

日時計の影めぐりゆく春の土
いかなごを煮て郷愁に誘はる
慎ましく相模の海を春の雷
陽炎や街に「大神古戦場」
故人みな饒舌なるや春の夢

平塚 丸屋詠子

耕され黒く光るや春の土
泥濘んで轍錯綜春の土
農事曆を眺むる縁や土恋し
木の芽越し跳ぬる野鳥のダンスかな
木の芽越しくると見れば安房の山

利根 倉田星歩

病棟をつなぐ廊下の余寒かな
老農夫春の土揉み土を嗅ぐ
飯茶碗しの字くの字の白子干
野遊びの煮物揚物順送り
ポスターの役者流し目花吹雪

さいたま 本橋稀香

別珍の赤き鼻緒や三月路
江戸弁の抜けぬ老妓や大石忌
春場所やひかる小兵の奇手妙手
青き踏む「いご鎌倉」の隠れ道
ペリカンの嘴いつぱいに春の水

伊奈 菅原卓郎

白魚や湖の残照透けてをり
特選を受くる喜び初桜

綿引まりこ

六文銭を焦らす幟や春疾風
すみれ咲く少女は空の無い街へ
古希過ぎて挑む美大や土筆坊

さいたま 新 暦文

ペンギンの急な旋回春疾風
春疾風牛は目を閉ぢ反芻す

亡き友の残せし畑蝶の舞ひ
陽春の私鉄で訪ふや兜太の碑

春耕やエンジン噴かす心意気

若狭 岡本祥子

自販機に熱き茶を買ひ梅探る

池田珪子

鳥帰る約束ごとを思ひ出し
鳥帰る残る羽音の別れかな
運針を止めしミシンや春惜しむ
出漁の男振り向く山ざくら

ガレージの漬物桶の薄水
亡き人にバレンタインのチョコ届く
春疾風タクラマカンの砂運び
他愛なき内緒話に春の風

春雨や傘を差す人二三人

さいたま 元田亮一

せせらぎは水菜育つる命水

篠崎紀子

モノクロの微笑みのこす秋子の忌
春の水一列となる通学路
百千鳥達磨さんが転んだ
瀬戸内の舟屋浮き玉干鱈

雑談をしつつ洗ふは水菜かな
春浅し旅情は水に澄みにけり
春浅しボール蹴る子の高笑ひ
昨日ふと髪切り詰めて春を待つ

山焼のゆらめく影の男衆

さいたま 清水桂子

名槍と舞ふ黒田節春の宴

風光る君三十の新天地

さいたま 播磨 進

山焼の火と黒煙が空焦がす

文福茶釜のお話楽し春の宵

三月や祝儀袋を買ひ足す日

復興の町を見守る春の星

うらうらと姑は嫁に変化球

葉挿し流るる里も山も春

ビッグベンの鐘の余音や風光る

加藤でん治

椿咲く自己主張の強き白

東京 畑宮栄子

お清だけ朝寝咎めず世話をやき

茶室には佗助の紅と静寂と

小枝剪る鋏の音や春の庭

春一日孫に連れられディズニールランド

朝つもり夕には消えて春の雪

湯治場のこけしほほゑみ春の風

屈まりて赤き芍葉の芽のぞく

水仙花律儀に咲けり爪木崎

北窓開き花の香りに深呼吸

杉 戸 佐々木史女

皺の無き長押の夫やバレンタインデー

さいたま 森美枝子

北窓ひらき隣家の犬に声を掛く

バレンタインデー軒に列なす雀どち

陽炎や砂場で遊ぶ子供たち

三越の獅子のたてがみ春時雨

かげろふや歩きたいのか石地蔵

日溜りの公園墓地の孕婦

長生きの少し淋しき春の暮

絶筆の細き癖文字白椿

凜と立ち瞳奇麗な卒園児

さいたま 山岸久美子

蕨摘む手立てに人の差育ちの差

手すさびの三味の流るる春の宵

初蝶や可憐に舞ひて庭よぎる

香田裕誌

春の宵球の体積解けぬまま

名刹のありのままなる臥竜梅

青き踏む足裏にひびく地の鼓動

老梅や寿命の限り咲き誇る

天穹をまたぐ勇士や春北斗

春愁や独り米寿の暮し振り

走れども椿ばかりや岬まで
荒潮に傾ぐ小舟や白魚漁
蘊やひたすら我慢我慢せよ
誓子の忌青嶺まぢかの丘に立つ
三鬼の忌鳥シリアルを貪りぬ

さいたま 秋谷風舎

花菜を添ふる魚身やはらか小料理屋
そそり立つ立山連峰花菜風
鳥帰る弟子入り決むる十八歳
大谷の乗るチャーター機鳥帰る
北欧の暮らしに慣れて鳥帰る

若狭 畠中風花

日だまりをその身にまどふ内裏雛
少しづつ家族の揃ふ春炬燵
表札に名前書き足す梅日和
梅が香やクロスワードの手は止まり
梅が香やいちばん星の見ゆる頃

石関六弦

鶯や深谷シネマの赤煉瓦
春めきて籠へあふるる地場野菜
草青む合格の子の語る夢
土手青む目指す歩数とカロリー値
うぐひすの里の校舎に迷ひ込む

さいたま 阿部貞代

鳥引くや彫り師に似たる木の仏
吾は父の自慢の娘なり山笑ふ
梅が香や息災さうな鹿の糞
「梅祭り」済みて満開梅の花
梅真白三方湖畔の舟の小屋

若狭 松村笑風

喪服の背の揃ひの家紋鳥帰る
杯上ぐる父の遺影や鳥帰る
訣れの日いまやしばらく鳥帰る
目に刺さる遺骨の白さ鳥帰る
鳥帰る待つ人のなき戸の重し

東京 山中いちい

野を焼けば忽ち風の生まれくる
花粉症帽子目深に診療所
木の芽時夫を乗せたる救急車
お酒なら何でもよろし春の宵
鳥帰るテトラポッドを洗ふ波

山崎郁子

野を焼くや臨月に入る小屋の山羊
踏切のあちらとこちら恋の猫
止むまでの二合徳利春しぐれ
葬送の消えゆく車列春の雷
山覆ふ煤を嗅ぐや老椿

上尾 室井早都子

雪割草溪に生ゆるや密やかに
日本海臨むざれ尾根残る雪
湯の町に夢二の恋やはだれ雪
霾や逃避行の記読む真昼
楼蘭の鵬羽搏ける黄沙かな

さいたま 前田夏野

琴の音の零るる路地や春の雷
友逝きて寂るる庭や紅椿
宿酔や六腑に染むる蜆汁
六道湖に溶けゆく夕日蜆舟
雑踏にふるさと訛り鳥雲に

さいたま 大熊健司

花冷えや思はぬ人の深情け
深呼吸して臨むガラポン春日和
三幸や雪解け水の沁み渡り
雪柳雪なき庭を和ませり
春の水山潤へば鳥もまた

川島夕峰

メモ書きに母の人柄種袋
当て字キラキラ孫の名読めず雛祭
木の芽吹く枝のふるへのこそばゆく
春の雷父がぼつりと馴初めを
春雷や幼馴染と間が揺らく

吉川 杉浦千祐

名将の銅像の城桜咲く
選りすぐり蒲公英の輪の首かざり
雪を踏み厚き戸開くる無言館
春の街道むかし早駕籠いま車
茅葺きの古刹の裏に残る雪

森下美智枝

よちよちと母の胸まで青き踏む
春の雪ちよつと丸めてみたりけり
開花日を競ふこの国春うらら
甲子園霾り刹那選手消ゆ
光る風に乗つて飛びたやパリの空

さいたま 駒谷行雄

アクリルのハブラシ立てに春の色
雛の間にデイサーピスの始まりぬ
背守りのずつと揺れをり春コート
友達の飾らぬ口調草の餅
しまなみの島から島へ木の芽風

大阪 遠藤人美

霾来たる蒙古の悍馬蹴りし風
遠足のスキップの靴すみれ色
嵐電の花のトンネル徐行せり
弁当に桜餅付く佳き日かな
ほろ酔ひの古希の乙女ら花見舟

横山礼子

円き日や仮設住宅ひな祭り
透きとほる水の底方そこひの鮎あなの子ら
切り過ぎし前髪似合ふ春の服
古着屋も春服つるし客を待つ
早瀬きて手のひらほどの小鮎あなかな

川口 新井のり子

風光る仁右衛門島の句碑の道
三月の光ゆたかに真砂女句碑
無為といふやすらぎもあり梅匂ふ
あたたかし象はやさしき眼して
強東風や農具手入れの老いの黙

白岡 岡本和男

たんぽぽや香りを放ちアピールを
残雪のスキー樂しみ湯は草津
菜の花や車内にぎはふ伊豆の旅
忙しなく行き交ふ燕世の波乱
残雪にヒールが抜けぬ誤算かな

さいたま 小川洋子

身の上の相談ありや寒き春
寒明けや胃腸の調子もよくなりて
寒明けや絵本には何故猫が多い
梅が香に人事異動の予感かな
ひとつとて同じものなし紫荊

さいたま 平野 楽

川底にゆらぐ若鮎三つ四つ
夕暮れて肩をすぼむる春の服
公園の造設春の夢を呼ぶ
春服を新調したれども降雨
満開の花を競へよ更の服

川口 田村福美

春宵やだらだら話す酔つ払ひ
春宵や猫揺らす尾を飽かず見る
聞こえくる猫のいびきや春の宵
明日の逢瀬に美容液塗る春の宵
卒業す甘味処で初タバコ

北出久美子

紫陽花に住み付めて居るかくれんぼ
病葉をひとつ拾ひて泪かな
蜥蜴の子尻尾見せつけ制止せり
小江戸道江戸風鈴の風来たる
古時計時の記念日忘れをり

所沢 関根千恵

摘草の香は柔らかに籠に住み
アドレナリンいっぱい出して畑返す
鳥獣の害怯まずに種を蒔く
畑打ちや指輪はとうに納めおき
北陸は一足遅き露のたう

若狭 西川昭代

摘み草のひとつひとつにある名前
やはらかき訛好もし山桜
地中より生まるる命春の雨
故郷にむかふ列車やよもぎ餅
かたことと車輪の弾み風光る

若狭 森下悦子

浅春のリハビリ室にひとあふる
花束の微かに香り春浅し
銀色に光る公魚食はず賞づ
畦道に好きな青色いぬふぐり
木の芽晴みどり児一歩また一歩

さいたま 菅原靖子

鈴つけし猫と鈴なき猫の恋
わだかまり解けゆく文や春の雨
母恋へば白き椿のひそと咲き
この辺り昔は寺領猫の恋
目に見えぬ雨となりけり紅椿

さいたま 穴戸洋子

スキップの苦手な子居て春山辺
トンネルを出れば正面春の山
正面にマグマ秘めたる弥生山
朽ちかけし祠を守る母子草
避難所に生れ変りや母子草

所沢 飯室夏江

指先にざらざらと黄砂つく
マラソンの仮装の列に竊ぐもり
靴紐をきりりと結び春の旅
あてもなく初蝶追ひて一人旅
うららかやケーキ屋までのまはり道

樋口元美

黄砂来る洗車に魔法かけにけり
霾や黄河の土を運びくる
貸切の平等院に舞ふ桜
グリーン車大奮発の春の旅
茅葺きの能舞台へと花吹雪

さいたま 小駒さち子

湯気昇る朝のコーヒー冴返る
寒戻る部屋に眩く独り者
人生の終まで咲くや花椿
静粛な空気に呼名卒業式
卒業に笑顔の師弟涙目に

武田重子

離れ間の時空迷はず雛の燭
病床に高さ探りて飾る雛
啓蟄のビルの谷間に古書の市
啓蟄やのらくろ八巻伍阡圓
スカーフに逆風受けてミモザの道

岡田芳春

ものがたり閉ぢ込め彼方へ春の雲
音はづれ俯く我の卒業歌
老木の梅ちらほらと香あらた
啓蟄や空の蒼さに後退り
もくもくと夢の後おふ春の雲

さいたま 鈴木香音子

ものの芽に呼び戻さるる来し方よ
器にも箸にも残るうどの香よ
卒業の校歌に泣かぬ子ばかりなり
街路樹の剪定終はり空近し
シクラメン終の一輪直立す

東京 柳父はる

待ちかねし開花と共に黄沙来る
魔女箒借りたきほどに黄沙降る
予兆なき異動の内示霾ぐもり
霾るや白球霞む甲子園
雨あがり黄沙流れて葉に雫

稲野幸子

啓蟄や火の粉舞ひ飛ぶ二月堂
啓蟄や終活ノートまだ白紙
父は石母は花好き雪柳
咲き満ちて庭の主役や雪柳
花冷やふるふる揺るる茶碗蒸し

さいたま 三浦真由美

名残り雪草木に軽く薄化粧
明日も又会へる友あり紅椿
春耕や助つ人孫のおよび腰
孤外し深呼吸する城の松
姿に惚れ香りに酔ひて盆梅展

和歌山 嶋田洋子

啓蟄の雨のひと日を昆虫学
啓蟄やつかまり立ちの得意顔
啓蟄やシルバーバスも混み始め
雪柳老母少女の顔になる
今日の風に従うてみる雪柳

門真宏治

紫木蓮女子高校の一期生
雪吊のやつと解かるる兼六園
列長き洗ひ観音水温む
春燈や石山寺の源氏窓
吉原の見返り柳芽ぶきをり

さいたま 小野町子

幹太しなびきもどりて雪柳
雪柳蕾の先の赤味かな
啓蟄や初心にかへり足踏みす
山椿茶盆に山のごとく置き
啓蟄や影踏み遊ぶ親子かな

今西 操

啓蟄や求人広告見てをりぬ
啓蟄の鳩の目赤くまた怖し
啓蟄や天ぶらからり浮上せり
雪柳ゆらりと躲す小言かな
春愁や母の歳をこゆる日の朝

さいたま 石井直子

入学す名前でつくる児の印鑑^{はんこ}
歩行器にすがりトイレへ冬の夜
茶を作る野草は葉里の春
車椅子目線が変はり知る景色
すかんぼや噛んで遊びし昭和の子

藤沢 小島喜代子

春寒し顎引き越ゆる箱根坂
木曾谷の陽射し閉ぢ込めたる露味噌
神楽坂闇夜さ迷ふ猫の恋
春時雨林の奥に文殊堂
雨下駄の赤き爪皮春しくれ

石黒由美子

車椅子押す吾に笑むや朝の梅
寒明けて彼方此方に花の香を
自分史に登場する梅寒波越え
川岸に光りまばゆき猫柳
太公望振り向く側に猫柳

さいたま 榎本道代

春近しジャングルジムのてつぺんへ
妹の来るたび減りぬ雛あられ
ドローン襲ふ鳥の群れや風光る
花散りて鳥滑降して遊ぶ
寺ごとに変はるばた餅お中日

横浜 石井妙子

啓蟄やぞろりと動き風を待つ
啓蟄や軋びて土の香り嗅ぐ
啓蟄や風の膨らみ草香る
古雛の朱淡く残す爪の紅
雛の膳小さき平和を願ひけり

草加 持永喜夫

教壇に一輪挿して卒業す
コロナ禍に心で歌ふ卒業歌
候補生帽子飛ばして卒業す
卒業生コーラージュ胸に行進す
書き掛けのマドンナ残し卒業す

さいたま 北山建治郎

大木の花みえ隠れ藪椿
花の兄の散りぎは愛づる人あらず
死してなほ妖艶なるや椿落つ
春めくや日々小旅行一万歩
卒業生見送りし後閉校す

東京 清水美千子

啓蟄や高速道路渋滞す

若草山に煎餅せがむ春の鹿

蠶やボンネットに書く中国語

晩春や母を背負ひて縁切寺

大木に羽化待つ蝻春の山

さいたま 山下ユリ子

春疾風袋小路に砂の層

再会は彼岸の度の生家かな

たつぷりと白魚のかさ客目線

春疾風一足飛びに諸国越す

春嵐欠航に連泊の宿

さいたま 篠原さよ子

春山や鈍行でゆく一人旅

山小屋の窓開け放ち春の山

春の山川のせせらぎ音高く

青年が駆足でゆく木の芽道

料理屋のおかみ自慢のしじみ汁

湯浅 和

雪柳さらりと交はす身のこなし

啓蟄や十年ぶりの同窓会

啓蟄や札所巡りの時刻表

啓蟄や八分の一のバイオリン

諍ひは日常茶飯春愁

木谷 葉子

清々し朝の空気に初音かな

古雛や明治の祖父の候文

沈丁花三寸ながら花こぼす

春雪や子犬は走りまはりたり

災害を鎮むる春の祭かな

鬼石 榊原聰子

「流浪の民」の譜面ばらばら春の風

時流れ一世駆けぬけ白梅光

青き踏む少女彼方の海光る

踏青の心生きとし生ける者

陽炎や新幹線の無き時代

宮代 関谷多美子

文庫本手にしまどろむ春の昼

春うらら飛んでみやうか鳥になり

ひな人形飾りて断捨離迷ふ我

春キャンブ快音響き場外へ

早咲きの桜一枝母送る

さいたま 三森恵子

古雛や早く飾れと目で合図

雛の前童謡歌ふ淑女かな

二階迄開院祝ひ春爛漫

春来るやファッション審査グランプリ

異国にも慣れたかと聞く三月なり

和歌山 南條さわゑ

外は雪温泉猿になりし俺
頭には手拭のせて雪見酒
梅香り花の一報待つ親子
雲海に春の訪れ波をうつ
窓の外季節はづれの春の雪

東京 桐山遊童

春塵やごつた返しの陶器市
子ら集ふ葉山の海辺桜貝
摘み草を洗ひ葉脈立ちにけり
桜茶屋暖簾くぐれば三極香

さいたま 糸井しるく

春嶺やガイドブックのAコース
スタンプラリーわくわく止まぬ春の山
春の山見ゆる足湯の賑やかし
映画終へ余韻のままに母子草
「はないちもんめ」次はたれかれ母子草

さいたま 緒方みき子

紅梅の花散る道の散歩かな
仏だんの水仙の色かがやけり
百鳥や三月の空青々と
畑のすみ一步前進ふきのたう

藤岡 加藤ナヲ子

鳥帰る帰れぬ民の朝餉かな
「北帰行」歌ひし人や鳥帰る
花衣似合ひし母の舞姿
花衣似合ひし女人と太鼓橋
鳥帰る列車も目指す終着駅

東京 深沢りこ

春めくやあられ供へて花活くる
鶯の声につられて小休止
春告鳥第二声待ち耳澄ます
手招きす桜餅屋の福娘
海底にも春時雨プランクトン起きる
亡き祖父のネクタイピンで卒業式

東京 中村まどか

木の芽風櫛広場に蚤の市
木の芽晴園児さんぼの縄電車
古河亭芽吹く音消す物見客
晴れ渡る空へ学帽卒業式

さいたま 鈴木藻好

作品鑑賞

山本鬼之介

春浅しシャベル戸口に並ぶ街

寺町知子

去年から今年にかけて、北陸や東北方面は想定外の大雪に見舞われ、それ以前に地震と水害で甚大な自然災害に遭遇した被災地能登も例外ではなかった。豪雪地の市街地や居住地では、日中は勿論夜中でも除雪車が活動したと聞いていたし、その様子をテレビ放映などで視て、体験したことのない雪の猛威に驚愕した。

豪雪地の商店街や住宅地では、各々の戸口に大きなシャベルが用意しており、手の及ぶ範囲の自衛作業に努めていた。屋根の雪下ろし作業で怪我人や死人が出たり、雪の重みで家が潰れたこともあったようだ。

この俳句は、中七の「シャベル戸口に」の措辞によって、読者に過ぎ去った大雪の日々のことを思い起こさせる効果をもたらしている。

薄霞十七文字に誤字脱字

小林京子

言うまでもなく、俳句は句意に沿った正しく正確な文字の表記が必須条件である。一字の文字の脱字や誤字によって全く句意不明の俳句になることもあり、うっかりミスは許されない。掲句が示すように、一句の中に誤字と脱字があると思えば救いようがない。

濃い霞は視覚の働きを遮断してしまうが、薄霞はある程度の視覚の働きを残している。大事な十七文字に欠陥のある俳句を、何とか読み取ろうとする行為と繋がっているように思える。

裸婦像や春風まとふ幾重にも

菅原真理

何処かの公園にある裸婦像なのだろう。作者が其処を通る度に目している像なのであるが、今日は何となく雰囲気が違う。寒風に吹き曝されていた冬から桜の蕾が膨らむ春を迎え、裸婦の表情も和らいで見える。通り過ぎてゆく風は実に優しく、その風が極薄のベールと化して像を労り包み込んでいるように思えたのであろう。優雅にして繊細な俳句である。

津軽富士望み城下は桜どき

岡田宣子

津軽富士は、青森県の最高峰である岩木山のことで、地元ではお岩木山とかお岩木様と呼ばれている郷土富士の一つである。標高一六二五メートルの成層火山で、太宰治がその山谷を、

「十二単を拵げたよう^でで透き通るくらいに婢^お媚たる美女」と喩えている。

岩木山を遠望している場所は言うまでもなく城下町の弘前市で、弘前城のある弘前公園で、毎年四月中旬から五月の連休まで「弘前桜さくらまつり」が開催される。

一八歳でデビューした演歌歌手・松村知子のヒット曲である「帰ってこいよ」が聞こえてくる胸の高鳴る俳句である。

逆縁の墓にささやく春の星 反町 修

逆縁の墓の事情を知っているだけに心に迫る俳句である。春を迎えた墓地を渡る風は柔らかくて優しい。「西の空を染めていた夕焼けが消え、夜の帳が下りた。話し相手の居ない墓の故人に、春の星が話し掛けてくれているのであろう」と、作者が星空を仰いで思っている。

三月やジャングルジムに分け入る子 阿部幸代

児童公園などに設けられている遊具であるが、敏捷な子供とそうでない子供とでその動きに歴然と差が現れる。子供時代を振り返ってみると、筆者が卒業した東京都中央区の本小学校（谷崎潤一郎の母校）に隣接している阪本公園のジャングルジムで、よく頭をぶつけたことを思い出す。言わずもがなの後者であった。掲句の子は、前者であり、全身をバネのように使って四角い空間を素早く潜り抜けてゆくのである。

卒業のカーテン閉づる美術室 森下山葉

高等学校の美術の授業や作品制作を行うための設備が整った専門の教室で、イーゼルや石膏像、そして、写生用のモデル台などが置かれている。美術部の部員はか、三年間世話になった卒業生が、室内を念入りに清掃して諸道具を整頓し、最後にカーテンを閉じて美術室に別れを告げるのである。感情が高まり、ほろりと涙を浮かべる者も居ることだろう。

道標のたもとに忍ぶ葦草 皆川更穂

札所巡りやハイキングなど、野趣に富んだ所を歩いていると目に付く道標「みちしるべ」である。その場所の地名の左右に矢印があり、それぞれの方向の地名と其処までの距離が表示されている。距離表示は今では「~~みちしるべ~~」だが、昔は里であった。今でも江戸時代から遺されている石造りの道標に出会うことが有るかも知れない。

さて、瘦せた土地でも力強く自己の存在を示す葦であるが、とある道標の根元にひっそりと咲いている。その道標で足を止めて葦に気付いた旅人は、心を癒やされてまた元気に歩き出すことだろう。今の時代は各種の便利な地図も揃っており、スマホという文明の利器もあるので、「みちしるべ」に頼ることはないはずであるが、心の癒やしの道具として、いついつまでも残してほしい。

球乗りのピエロの涙春なかば

飯田忠男

道化役者を意味するピエロは、今ではサーカスの道化師を指す言葉として認識されており、濃い化粧と派手な衣装で本性を隠して演技に徹する仕事である。観客をはらはらさせる球乗りの演技に拍手を贈ると同時に、隠された真顔を見てみたいという心理も湧いてくる。顔に描かれた大粒の涙と、もしかして、化粧の下に本物の涙もあるのではと思わせる。

日時計の影めぐりゆく春の土

丸屋詠子

「時間の目盛を付けた平板上に指針を固定し、太陽光線による指針の影の位置によって時刻を知るもの」という広辞苑の解説を読み再認識した日時計であるが、その歴史は実に古く、紀元前三千年の古代エジプトはおろか、それ以前の古代バビロニアにまで遡ると聞いて驚いた。そのような歴史的背景を踏まえて、身近で実用されている日時計で時刻を知ることは大変感慨深いことだと思ふ。指針の影を受け止める春の土が、悠久のロマンを物語っているように思えてくる。

女坂あると知りつつ梅見坂

吉川拓真

なかなか興味の湧く俳句である。先ず最初の疑問は、この梅見坂が何処にあるのかと云うことである。浅学筆者の記憶

の中からは浮上せず、仕方なくインターネットを開いてみると、横浜市港北区大倉山二丁目に、大倉山公園の梅林に通じる「梅見坂」と名付けられた270段の急坂があることが判った。掲句の坂がこれである可能性は少ないと思うが、作者と俳句を共有する上での手懸りになったような気がする。

作者は楽な女坂を登ろうと思ったが、見頃の梅花に惹かれて梅見坂を選び、途中その急勾配に後悔したのである。

抽斗にあの時の鍵なごり雪

田中弘子

謎を秘めた俳句であるところに魅力がある。「あの時」の時と「鍵」が何の鍵であるかの謎解きを読み手に求めているのであろう。御簾の向こうで眼を輝かせてその答を待っている作者の顔が見えるのだが、いくら考えてもすっきりした答が浮かばない。「名残の雪」から男女の別れという筋書が見えてくるのだが……。

春疾風火影荒ぶる隅田川

霜多光代

隅田川の水も温んできた三月、川を行き交う屋形船。船の屋根の周りに吊り下げられた提灯を、川面を渡る春の強風が揺らしている。船内の卓には料理が並び、早々と酒宴が始まっている。外から見れば荒れ模様の屋形船であるが、船内は実に長閑な春景色である。

木の芽越しくりりと見れば安房の山

倉田星歩

朝自宅の庭に出て草木の様子から春の息吹を身にかけている作者である。膨らみ始めた木々の枝を観察しながら眼を転じると、見慣れていたはずの山が新鮮に映った。「くると」と云う身体の動きの表現と、山に冠した「安房の」という飾りことは、句を活き活きとさせている。

ポスターの役者流し目花吹雪

本橋稀香

このポスターの雰囲気から思い巡らすと、大衆演劇いわゆるどき回りの役者がぴったりだと思ふ。地方都市の或る町にやってきた人気のある一座で、街の要所要所にお目当ての花形役者のポスターが貼つてある。お年寄りも勿論、中年男女や娘さんたちまで、芝居の幕開けのくる日を心待ちにしている。特に女性たちは、メーカーヤップした役者の流し目に心を弾ませているのであろう。折から市民会館のある公園の桜が満開で、役者のポスターに花吹雪が、まるでお捻りのように降り注いでいる。

春の水花嫁映し舟着き場

綿引まりこ

時代を遡ると、嫁入りに輿や馬、また、舟が使われたが、近年舟を使つての嫁入りが復活したように聞いた。この句の

花嫁もその一人であらう。小舟に乗って川を下ってきた花嫁が、父親に手を取られ静々と舟着き場に降り立った。その水面に清楚な花嫁を映し、ゆつくりと流れる春の川である。

出漁の男振り向く山ざくら

岡本祥子

遠洋漁業と云うほど長期ではないが、数日間の漁に出た漁師であらう。見送りに来た家族や漁協の人達に手を振り、船が港から遠離つて行く。映画のシーンと思わせる光景であるが、漁師の一人が、小高い丘にある山桜をじつと見ている。何かその木に特別な思いがあるのだろうか。若狭の小浜港が目につかび、心に残る一句である。

モノクロの微笑みのこす秋子の忌

元田亮一

いつもは水明発行所の長押しに、歴代の主宰と共に並んでいる二代目主宰・長谷川秋子の写真である。数年前まで二月に行われた如月忌で、近年は水明忌で、三代・星野紗一、四代・星野光二の写真と一緒に句会場に出張する。和服で羽織を召し、髪をアップにした秋子は、少し横を向き微笑んでいる。生前の秋子知らぬ作者は、この写真を手掛かりに秋子のイメージを作り上げ増幅しているのであろう。「モノクロの微笑み」と云う措辞に、作者のもどかしい心の内が見え隠れしているように感じた。

水琴窟 (水明集四月号鑑賞)

池田雅夫

良き名前もらひ受けたり仏の座 門真宏治

この「仏の座」は春の七草の一つの「田平子」であろう。田の畦などにはりつくように生育する。羽状に裂けた葉を地面に広げ軟らかな莖を数本伸ばして小さな花をつける。そのロゼット状の葉を仏の台座に見たてて「仏の座」と呼ばれている。他に「三階草」と呼ばれる「ホトケノザ」もある。

虎落笛ベンチ一つの無人駅 大熊健司

「虎落笛」は冬の烈風が柵や竹垣などに吹きつけて笛のよな音を発するもので、強弱や高低もさまざま。一日の乗降客が少ない「無人駅」。そのホームに置かれている「ベンチ一つ」。運転間隔が一時間に一本ほどの静かな駅なのである。そんな無人駅にも毎日出勤する人の生活がそこにある。

振り降ろす指揮棒の先淑気満つ 羽鳥秀子

「淑気」は漢詩からきた言葉で、正月の天地に漂う清くめでたい気配や空気を、気分を表わす。新年初のコンサートであろうか。交響曲のおごそかな第一音を奏でるべく「指揮棒の先」を静止させる指揮者。その一瞬に「淑気満つ」である。

乾風^{あなし}来て顔の無駄毛の伸びにけり 平野 楽

「乾風」は冬、海岸に吹く北寄りの強い風。主に西日本と呼ばれている。東海道沿いでは「べつとう」、日本海側では「たま風」と呼ばれる。「顔の無駄毛」というから髭に限るわけでもない。頬や目のまわりなど、とくに女性には気になるところ。乾風で「伸びにけり」と気づいてしまったのだ。

寒雀発条仕掛のやう歩く 緒方みき子

鳩などの中、大型の鳥は二足で歩くが、雀などの小型の鳥はピョンピョンと跳ねるように歩く。庭に降りてきた「寒雀」。その行動はまるで「発条仕掛のやう歩く」のである。チュンチュンと掛け声のように鳴きながら跳ねている姿がいとおしく思える。「発条仕掛」にたとえた観察力を称えたい。

賑やかに餅の申告十四個 山中いちい

その昔、正月といえば「餅」が一番のごちそうであった。餅をたくさん食べることが自慢であった。仲の良い友達と会い、その話題はやはり餅の話。食べた餅の数を言い合っている。「十四個」とは。正月中に食べた合計かも知れない。

山の辺の万葉歌碑や仏の座 石井直子

春の七草の「仏の座」に適う万葉歌を思い浮かべると、まず、《君がため春の野に出でて若菜摘む我が衣手に雪は降りつつ》（光孝天皇）、《明日よりは若菜摘まむと標めし野にきのふも今日も雪は降りつつ》（山部赤人）がある。

手がそれで自由になりし手毬かな 川島夕峰

童謡の「てんでん手毬の手がそれで…」を思いだす。子供の正月の遊びは男の子は独楽、女の子は「手毬」か羽子つきが主だった。手毬から見れば「手からそれ」であろう。「自由になりし手毬」はどこへ行くのだろうか。まさか殿様の…

電飾の夢の世界や枯木道 武田重子

駅前広場や並木路などの木々がすっかり葉を落とし、その木々に「電飾」を設けるところも少なくなない。とかく虚無的になりがちな冬の街に「夢の世界」を演出するその効果は量り知れない。木々には迷惑でも、人を明るくするのは確か。

討ち入りし武士の意気地や春の雪 桐山遊童

「討ち入り」といえば「赤穂浪士」。『時は元禄十四年十二月十四日…』の名調子。現在の暦では一月に当たる。その夜は雪であった。「春の雪」を眺めながら当時を偲んでいる。

むくつけき男の指の独楽回し 嶋田洋子

「むくつけし」は、おそろしいとか、むさくるしいの意味をもつ。その「むくつけき男」も少年時代は精悍で男前だったかも知れない。「独楽回し」の名人だった男も今は近所の少年を相手に独楽回しの極意を伝授しているにちがいない。

冬茶会両手で味はふ茶碗肌 小島喜代子

茶器を持つ両手の感覚を「味はふ」と工夫しているが、字余りが気になる。名のある器でなくても実には手になじむのであろう。「茶碗」をとおして茶の温もりが伝わってくる。そこで、「冬茶会両手になじむ織部焼」としてはいかがか。

ひび割れし田にひれ伏すや枯れ蓮 榎本道代

蓮根を掘るために水が抜かれた田はすっかり涸あがり「ひび割れ」ている。葉は枯れ尽し茎だけがへし曲がり無残な姿を留めている。夏の青々とした勢いとは対照的な「枯蓮」の姿を「ひれ伏すや」と詠嘆し、それを哀れんでいるのだ。

冬晴や市民マラソンの地響 室井早都子

冬の時期は各地で「市民マラソン」が開催される。参加者も年々増えているという。その足音は「地響」となる。極端な破調や中七の字余りを工夫することも大切である。

俳誌望見 梅澤輝翠

「天塚」

令和七年三月号 通卷二八四号 隔月
主宰 宮谷昌代 発行所 宇治市小倉町

昭和五十三年 木田千女が宇治市にて創刊。師系鷹羽狩行千女先生の「一句の底に流れる愛の調べこそ」を俳句の目標としてゐる。厳しくとも楽しい句会をしております。

冠集 実万両 主宰句十六句より五句

落葉蹴る何の不満もなければども

冬あたたか牛大胆に尿放つ

登美子邸の句座のにぎやか紅葉晴

千年も一年も過去実万両

結論は持越し懐手解けず

落葉つて蹴ってみたくありません。特に堆く積まれていたりすると、だからって不満がある訳ではありません。よく解ります。二句目暖かい冬の日牛の大胆な行為、この句は三句目の登美子邸の句座での出来事かと思われまます。勾玉集登美子氏の「牛啼きて昼どきを知り年の暮」と一致するのは。なんと長閑な、なんと大らかな句座なのでしょう。千年も一年もそして昨日もさつきも過去です。すべてが過ぎて行く中で万両の赤い実が撓るに今ここにあるのです。五句目、何だったのでしょうか結論でなかつた話とは、まだ納得いかず懐手をしたままの状態です。懐手が解けたのは何時。

勾玉集 二十六名 各七句より六句

寒紅をひきてめまひを覚えたる

ふくろふは知恵の神様声を待つ

能勢 ゆり
竹村 良三

わが街に煙突ひとつサンタ待つ
霧氷林抜ければ一茶住みし蔵 松本 昭子
茶の花や和紙の白さの朝の月 前川美智子
牛啼きて昼どきを知り年の暮 平 万紀子
宮崎登美子
管玉集 二十六名 各六句より五句 主宰選
文豪の机北向き冬ざくちら 加藤 草児
着ぶくれて尻の重たくなりにつくり 倉本 節子
毛糸編む振られしことに気もつかず 中島 佳代
みちのくの正に雪見るだけの旅 松見喜美子
朝市の競り合ふ男息白し 中本久美子
白鷺集 二十四名各五句より五句 主宰選
核心に触れずつるりと衣被 西堀 良子
開戦はしないさせない開戦日 金森 友子
チュチュのごと綿を纏ひし雪螢 大賀 鱈子
寒月に被爆樹の影研がれけり 山川 一遊
茶の花や孤独が好きで白が好き 西山 一則
最後になりましたが、巻頭言として宮谷昌代主宰の言葉があります。「新と真、今日の心で」
千女先生はいつも「新しい句」を作れ、「いまだかつて誰も作っていない句」を作れと言っておられたが、実際に「言うは易く行は難し」である。上手に詠めたと思つた時は要注意で、誰かが既に詠んでいた類句であつたりする。また、よく使われている言葉のフレーズもあり、短い十七音の俳句にするのは至難である。とは言え、「今、ここ、われ」と日々
の生活から自分の思いを私たちが句に詠んでいる。皆、ひとり一人自分の人生であり同じではない。「みんな違ってみんないい」のである。―中略
「今、ここ、われ」を再度思い「今日の心で昨日と少し違う今日の自分の思いを詠みましよう、そのわずかな積み上げが「新しい句」が作れることに繋がるように思われるのです」と結ばれたお言葉に心揺さ振られて感動致しました。

句集喝采

菅原卓郎

◆尾崎淳子「星置川」

本阿弥書店

著者略歴 一九五一年札幌市生。一九八〇年絵本「ゆきだるまのふしぎなたび」出版。二〇〇三年「藍生」入会。二〇二四年「青麗」入会。俳人協会会員。

吟行好きの作者、決められた時間内に定められた数の句を作るスリリングな作業が堪らないと事。画家の顔を持つ作者の幅広い視点での句が数多く掲載されている。

海光に屋根の照りたる梅の町
昼月にクレーター見え和布刈船

東京の名もなき坂に虹立ちぬ
原野の汽車花火の町に入りにつけり

第四句、作者在住の北海道の原野、そこを抜けて町に近づくと突然大きな花火が夜空に浮かび上がってくる。数秒後腹に響く音が追っかけてくる。北海道ならばこの景。第五句、松が取れ神棚に祀られていた達磨もどんの火の中に入れて磨を容赦なく火の中に蹴り入れる。切なさ、儂さがきりつと迫ってくる一句。

錫杖の一本急ぐ春の浜
藁屑を鼻に子牛の遅日かな

瑕疵の無き春青空といふ危険
寒鯉の遺跡のやうに沈みをり

見あぐれば秋の星座の停留所
第一句、四国遍路の土佐路は左手に太平洋を望みつつ終日浜路を歩き続ける。札所の間隔がかなりの距離で中七の措辞が的を得ている。自販機など当然ありません。一日が長い。

◆新 曆文「曆文三百六十五句」

著者略歴 一九四一年十月生。二〇一四年三月水明俳句会入会。

二〇一五年より二〇二四年に掛けての作品を収めた初句集。日常の細かな事象を捉えて丁寧に作り上げている。

露味嚙や下戸と上戸の向かひ膳
骨酒の香り嬉しき夏料理

リハビリの狭き歩幅に秋の風
陽炎を見つつ女の嘘を聴く

百選の水の郷なる心太
第二句、キュウリウオ目アユ科の香魚の骨酒であろう。カ

リカリに焼いて熱々の酒を注ぐ。「じゅつ」という音と共に香りが瞬時に立ちのぼる。継酒は勿論のこと、熱燗三回目の「名残り酒」まで所望するであろう真夏の一酌。第五句、名水百選の地、島原の湧水群が思い浮かぶ。「かんざらし」と心太が名水の恵みを受けて名物となっている。心太と名水の取り合わせが日本人の琴線を操る。

鯛焼や主義も主張も無き平和
鮑焼く海女の小声の艶話

手相見の言葉優しき冬灯
鈍色の能登を残して鳥帰る

編みかけのセーター解き恋終はる
第二句、狭い海女小屋でひそひそと艶めいた会話を交わしている。何の話だろう。小声が非常に効いている。第四句、震災の爪痕が未だ消えぬ能登。その地を去らんとする鳥さえも後ろ髪を引かれる思いでいる事であろう。復興を急ごう。

大村節代 選

鼓笛集

口笛はこころの音色春の山
清明の日の出まんまる街の上
つばくろの旋回二百八十度

石関六弦

永き日や電車乗る人皆無言
行く春や汚れ傷ある一円玉
永らへて昭和百年夏の雲

元田亮一

やはらかき春草小庭うめつくす
しばらくは抜かずたのしむ春の草
まれに来る黄蝶は庭の華となり

山岸久美子

温もりを吸ひて染め上ぐ紅椿
レコードのさやぐ針音春時雨
首を垂れ回つて落つる椿かな

皆川更穂

病みて知る子の優しさよ風光る
たんぽぽはタンバリン打つ子供の手
見返ればまつ毛濡れてる春の鹿

綿引まりこ

街並は生まれ変はりて春の土
落椿の音梵鐘に包まるる
縁あらば会ふ日のあらむ忘れ霜

丸屋詠子

憲法記念日オムハヤシから旅となる
春暑しバリアフリーの無き神社
桜えび通りの民家夏みかん

吉川拓真

墨堤に桜訪ねて橋行脚
菜の花や唱歌の世界今いづこ
夕星や霞む地平は春なれや

倉田星歩

原生の森の精霊囀れり
江戸風の帳場の老舗松の花
焼香の仕草さまざま花疲れ

香田裕誌

長きトンネル抜けて今入学す
巣立鳥初めて触れる他人の情
家離れ他人の飯が沁みる春

川島夕峰

花筏平和の女神乗せてゆく
花筏会ひたさ募る昨日今日
日本画展見入る心や春深し

朝一の消防訓練チューリップ
うららかや開店前の予約席
電線の揺れに耐へつつ囁れり

満開の花で昼餉や皆笑顔
窓辺まではいはい早し桜見る
窓一杯の桜吹雪を惜しむなり

薄暗き廊下の角に月下美人
畝またぎゾロゾロ続く蟻の列
トランプのゲーム感覚夏霞

蕨餅残る黄粉も旅の味
菜の花や目許やさしく回診す
うららかや術後回診余談咲く
ペダル踏み花菜の路や日帰り湯
門灯の灯しを忘る日永かな
春袷師の細き手の一問かな

南條きわゑ

樋口元美

森下美智枝

千坂平通

糸井しるく

篠原さよ子

諍ひのほぐれてよりの桜餅
盛塩に子燕よぎる神楽坂
夕茜まつすぐ呑んでさんしよの芽

花名札思ひ出ざる春の庭
花水木雨のしづくや泣くごとし
ピンク色の洋服羽織り春心

卒園や大きな服の小さき手
花曇ラバーの跡に過ぎし夢
春寿や路傍の花と竹ばうき

山下ユリ子

大島千恵

持永喜夫

鼓笛集作品評

大村節代

つばくろの旋回二百八十度

石関六弦

つばくろ、つばくらはめは、春暖かくなると、南方からやって来る渡り鳥。人家の軒等に巣を作るが、その愛らしい姿は古来から万人に愛されている。しかし近ごろは都市化が進んで軒先も少なくなり、つばくろもあまり見掛けなくなつた。

つばくろの飛ぶ様を旋回二百八十度とは、スピード、鮮やかさが伝わり、何とも楽しい。

永らへて昭和百年夏の雲 元田亮一

良くも悪くも、昭和百年は無視出来ない歲月である。近頃は昭和を知らない若者まで、昭和の歌やら、ファッションから、何だ彼だと言いつつ出している。

昭和は、第二次世界大戦を筆頭に、事多き時代であった。昭和は長かったので昭和人は多い。頑張れ昭和生れ！

まれに來る黄蝶は庭の華となり 山岸久美子

早春に白蝶がふわり来ると、庭の花が急に華やく。やがて黄蝶が舞うようになると、春もいよいよたけなわである。

鼓笛集巻頭（五月号）

私の好きな一句（自句自解） 菅原真理

蟬時雨ゆるりと時を巻き戻す

いつまでも暑い晩夏、公園や神社の蟬時雨の中に身を置くと、その渦にゆっくりゆっくり引き込まれて行きます。時を巻き戻すかのように幼き頃の記憶が次々とよみがえります。若い母や姉に出合いなかなか戻れません。そんな夏の白昼夢です。

特集（港）の見える俳句
巻頭作品10句

加藤耕子・鈴木太郎・染谷秀雄
森 ちづる・柴田多鶴子・鳥居真里子
古賀しづれ・山下幸典

俳壇

7月号
6月14日発売
定価1000円（税込）

巻頭エッセイ
井上康明

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅳ期」……朝妻 力・村上喜代子

新連載 俳諧文法への招待……仁平 勝
碧梧桐研究余話……栗田やすし

連載 季節の移ろい〜二十四節気……津川絵理子
俳人の住む町……小林貫子・仲井亮二
編集室の風景……天為俳句会
二度目の俳句入門……長谷川 權

今月の句……野火俳句会

俳句と随想12か月 安田のぶ子・矢野景一

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

WEB投句はこちら



作品募集

現代俳句全国大会は、年に一度、現代俳句協会が主催して行う伝統のある大会です。協会員に限らずどなたでも参加できますから、例年にも増してたくさんのご応募をお待ちしております。

■応募規定

①3句一組・2千円 何組でも可。ただし、新作未発表作品に限る。〔三組9句同時投句に限り、6千円を5千円にいたします〕

②題詠1句(無料)。昭和百年の今年は、「昭和」をテーマにした俳句を募集(題詠のみの投句は不可)。前書き不可。所定用紙またはWEBで投句のこと。投句料は普通為替、定額小為替(無記名、現金書留(作品同封)、郵便払込(青い払込取扱票使用)のいずれか。

※郵便払込…加入者名・一般社団法人現代俳句協会 振込口座番号・00160061526003

③送付先 〒101-0021 東京都千代田区外神田6-1-4 借楽ビル外神田7階 一般社団法人 現代俳句協会全国大会係 ☎03-3839-8190

④締切 7月31日(木)必着

⑤顕彰 協会会員誌「現代俳句」に発表。協会刊行物に採録

⑥賞 大会賞、会長賞、後援新聞社賞、特別選者賞、秀逸賞、佳作。

⑦全参加者に入選作品集贈呈

⑧全国大会 令和7年11月3日(月・祝)午後1時より「東天紅」上野店 ☎03-3828-5111 〒110-0008 東京都台東区池之端1-4-33

⑨記念講演 昭和百年をテーマにした講演 懇親会 午後5時より(会費8千円) 本年は別日、別会場にてイベント開催予定 (詳細は後日発表)

■特別選者名

植上植伊石石井五有網青	和田前前鈴錦桑伊池後福佐星久筑永小秋木高寺中宇宮
田田垣東川川口十村野木	田田川岡岡藤原藤西藤本怒紫野保井林馬野井村多喜
密桜雄天類狼太時秀彦王鶴	浩一弘明誠正治美子篤章弘明正美士
杉清水塩塩佐藤佐坂酒小後神桑桑黒倉木神河川川川上鹿春加恩臚岡岡岡大	浦水見野野藤藤井井川山山藤藤野田田岩田村村村智香お太郎樹一知石布
圭遺道仁文和直次郎貴昌治紗希	祐伶径介子太彦司郎子治希
芳野西成波並名中永中中長仲董つ津佃個津月千谷田田武田高橋高橋高岡高岡	賀木谷池田切木久井井村瀬里内井井里外玄寛蟬華江津悦代子
陽桃剛どり虹邑人	子花周り子洋人
渡渡米吉山山山山柳森森森本村武宮味水松松松堀堀堀星武二久播原林羽花	辺辺森田田本元本元本元木浦正正技
一和規成敏津香介	郎弘子子子子子

網野月を選

山紫集

角落ちて落武者のごと春の鹿

反町 修

犇めくや杜のぬた場に春の鹿

菅原卓郎

ゆつくりと元の暮しに春の鹿

新井のり子

春の鹿剥げし背中にハートの紋

綿引まりこ

春の鹿百歳を越す母の腰

——以上特選

まほろばの真中に棲みて春の鹿

曲淵徹雄

宵闇へ眼のひかり増す孕み鹿

正木萬蝶

電気柵内に虚ろや孕鹿

松井由紀子

古の神呼び覚ます春の鹿

松宮保人

もの憂げな母の眼差し孕鹿

丸屋詠子

眼の奥のかそげき影や春の鹿

丸山マシミ

雨に濡れむきだす肋春の鹿

池田雅夫

春の鹿吾も汝もスローライフかな

日高道を

春の鹿茶店の屋根の雨の痕

秋谷風舎

満潮の鳥居を見遣る孕鹿

遠藤人美

窶しても神の使者なり春の鹿

染谷風子

自他ともに省みる日日春の鹿

畑宮栄子

胎動に見開く眼春の鹿	宮崎チアキ	里山の焼け跡をゆく春の鹿	横山君夫
テムジンの駆ける草原春の鹿	持永喜夫	マタニティブルーもあらむ孕鹿	横山礼子
無言のままにすれ違ふ春の鹿	元田亮一	平安の宿る大仏春の鹿	青木鶴城
春の鹿こちらうかがふかくれんば	本橋稀香	眼差しはバンビのままや孕み鹿	新 曆文
近寄りて御辞儀上手な孕鹿	森 和子	振り向けばお辞儀して去る春の鹿	阿部幸代
青天の斑をあざやかに春の鹿	森川義子	目差はすでに慈母なり孕鹿	荒井俱子
孕鹿寄り来てなでる奈良公園	森下美智枝	気怠げに一声鳴けり春の鹿	飯田忠男
寄り添ひて心音三つ春の鹿	森下山菜	身を映す鏡のなくて春の鹿	池田珪子
春の鹿しつとり小雨にぬれてをり	山岸久美子	鷹揚に池のほとりを春の鹿	石川理恵
自転車で春の鹿追ふ奈良盆地	山下ユリ子	春の鹿雄一頭に雌数多	石関六弦
印結ぶ仏の半眼春の鹿	山中いちい	孕み鹿ポケット探りグミニつ	石田慶子
灯無き石灯笼や春の鹿	吉川拓真	落し角飾る旅館や鹿走る	糸井しるく

目差ははや母親よ孕鹿

井上玲子

春の鹿角無くなりて軽くなり

小駒さち子

春の鹿埴輪のやうな眼の円く

内田恵子

御蓋山を仰ぐがごとく春の鹿

小林京子

目はすでに優しき母の孕鹿

梅澤輝翠

宮参り一家を囲む春の鹿

近藤徹平

深き眸に母の落着き孕鹿

梅澤佐江

休耕地夜なはずれの春の鹿

榊原聰子

絶るやうな眼もときに孕鹿

大場順子

かたはらに鹿の親子ゐるわらび餅

佐々木史女

畑山に春鹿出ると広がる村

岡田宣子

明日にも身二つ成るか孕鹿

笹本啓子

やぶかげに毛艶褪せたる春の鹿

加藤でん治

のびやかに背負ふものなし春の鹿

篠崎紀子

舞台捌け身も心も孕み鹿

川島夕峰

春の鹿横たふ群れの時空かな

篠原さよ子

修学の生徒に集ふ春の鹿

北山建治郎

射干玉の闇に迷へる孕鹿

渋谷さいち

海に建つ朱塗の社殿春の鹿

熊倉千重子

異国語に頼すり寄せる春の鹿

嶋田洋子

我と遭ひ驚き去るや春の鹿

倉田星歩

気怠げに四肢なげだして春の鹿

清水桂子

巾子もなく産毛ふはふは春の鹿

河野はるみ

春鹿のまなじり潤む雨の奈良

下川光子

春の鹿かはたれどきの涙かな

霜多光代

柵を越す孕鹿なら許されよ

飛永 鼓

春鹿の寄り来る峠夕暮るる

菅原真理

孕鹿子に希望持つ親心

南條さわゑ

肚を蹴る未来の鼓動春の鹿

杉浦千祐

立ち止まる群に遅れて孕鹿

西幅公子

顔あげてゆるり反芻春の鹿

鈴木玲子

春の鹿人恋しらし里の道

野口和子

腕白の指指す彼方春の鹿

鈴木藻好

産みしあと春の鹿の毛色褪せて

野村美子

岩絵の具のさ緑の苑春の鹿

関谷多美子

しどけなく横坐りして孕鹿

原田秀子

春の鹿奈良に前方後円墳

瀬戸雄二郎

春の鹿潤む目悲し奈良公園

樋口元美

春鹿や育毛剤の効き目なく

高橋満耶子

春の鹿充電と言ふ名の休暇

檜鼻ことは

人のやう母のまなこや孕鹿

武田重子

インバウンドよお手柔らかに孕み鹿

福田千春

金華山警護の鹿の春駒も

田中章嘉

春の鹿観光客に気疲れす

保坂翔太

出産終へ眼穏やか春の鹿

寺内洋子

幽玄の燈籠照らし春の鹿

寺町知子

山紫集作品評

網野月を

雨に濡れむきだす肋春の鹿

池田雅夫

雌鹿にしろ雄鹿にしろ、鹿は春の季節に最も瘦せて細る生
態を有しているようである。落し角や孕鹿で表現され、あま
り見映えのしない春の鹿なのであるが、「肋」まで着目した
作者の眼力に感心する。しかも「むきだす」とまでのリアリ
ズムは、恐れ入るばかりである。雨に濡れて、痩せ細った鹿
のむき出した肋骨が、「春の鹿」そのものだということであ
るが、哀れな姿の春鹿に作者はエールを送って励ましてもい
るのである。

春の鹿吾も汝もスローライフかな

日高道を

「吾も汝も」は「あもなも」と読めばよいのであろうか。「吾」
も「汝」も自称つまり一人称にも使用されることがあるし、
対称つまり二人称にも使用できる。が、この句の場合は私も
貴方もの意味と解釈するのが順当である。夫婦間の会話の様
でもあり、親友同士の会話でもあり得る。読者によっては

ットへの語りかけと解釈する向きもあるかも知れませんが。
「わもなも」と古風に読んでも趣があるでしょう。

春の鹿茶店の屋根の雨の痕

秋谷風舎

我慢に我慢を重ねた「の」の四現である。一つ目は上五の
季語「春の鹿」であるから、我慢の為所は、その後三現す
る「の」の重ね方である。つまり絞り込み方がある種のリス
ム感を創り出しているということである。格助詞の「の」を
重ねる場合は、大きいものから徐々に中位のもの、そして小
さいものに収斂していく仕方が、方程式と言っても良いので、
この句は理にかなっているのである。それだけに「痕」まで
詳細に描写して雨上がりの景を表現している。

満潮の鳥居を見遣る孕鹿

遠藤人美

鹿というと筆者は直ぐに奈良を思い起こすのですが、この
句の場合は宮島の鹿群に取材している。いま現在は五百頭余
の鹿が野生の状態で生息しているということである。「鳥居
を見遣る孕鹿」に作者の心を投影させているのであろうか。
何かを祈願する心根を筆者は感じました。

寔しても神の使者なり春の鹿

染谷風子

上五の「寔しても」は他動詞の用法であって、つまり自然
界に在って、鹿が自らの様態を変化させながら季節に対応す
る生態＝能力を表現しているように感じられる。「神の使者

なり」は知識として知っているという感覚ではなくて、鹿に
自ずから備わった神使としての威厳というか、気品をにじま
せているところに注目したのであろうと解釈した。

自他ともに省みる日 日春の鹿 畑宮栄子

座五に置いた季語に作者の思いが集結しているようであ
る。春の雌鹿の窠れて物憂げな姿、あるいは雄鹿の落ち角し
たあとの姿を見て、「省みる」という措辞が自然に出てきた
のではないかと筆者は勝手に推測しました。「省みる」季節
は秋であつても良いのだが、ただ秋が想うことへの執着を主
にしているのに対して、春のそれは決めなければならぬ切
実とした現実を感じるのである。

角落ちて落武者のごと春の鹿 反町 修

春鹿の中でも雄鹿を活写している。鹿の角を大兜の前立
にして、すっと伸びた鍬形を想定しているのかも知れない。真
田幸村は脇立に鹿の角を用いているし、山中鹿之助は鍬形の
代わりに鹿の角を用いている。「落武者」はその大兜を脱ぎ
捨てて落ちのびるのであるから、この直喩表現は射を射てい
ることになる。

犇めくや杜のぬた場に春の鹿 菅原卓郎

自然に出来上がったものか、人工的に設けられたものか社

社にも沼田場があるのであろう。普通は猪の類が集まること
が多いと想像するのだけれども社社だけに境内の鹿が集まっ
て、占領してしまっている景であらうと推測した。シカ科は
ウシ目のようであるから「犇」が似合っている。

ゆつくりと元の暮しに春の鹿 新井のり子

上五中七の措辞は作者ご自身に向けた言葉であらうと解釈
しました。春鹿に励まされ勇気づけられながら平穏な日常を
取り戻しましょう、それも焦ることなくゆつくりと、という
祈願が込められているように解釈した。もちろん春鹿も雌な
ら初夏に出産して、雄なら角が伸び始めて「元の暮しに」戻
ってくるわけであるが、そうした春鹿の本質に作者の思いを
重ねた（取合せた）句作りであると言ふことができる。

春の鹿剥げし背中にハートの紋 綿引まりこ

春鹿の毛の抜けた背中に「ハートの紋」を見つけたのであ
る。鹿にとつてのハート形は、無意味なのであろうけれども
見つけた人間から見ると其処には何か意味合いを関係づけて
しまうのであろう。「はーとのこう」と読んで方がリズムは
良さそうであるが、「はーとのしほり」と七音で読んでも差
し支えない様に考える。春の鹿であるから、やはり「紋」で
はなくて「絞」が合うようである。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
小林京子 報

祝宴に空席ひとつ春寒し

喜恵

「飛鳥美人」眠る石室春寒し

マスミ

花一枝飾りて足るるひと日かな

由紀子

祝女のせまる鈴の音春寒し

卓郎

桜一枝挿して膨らむ独り居間

和葉

鶯の上枝下枝に影移る

稀香

書き置きはブルーブラック春寒し

亮一

——以上特選

枝珊瑚の帯留粧に初桜

節代

春寒や箆筒に仕舞ふ紺サージ

亮一

茶を啜り洩啜りする春寒し

はるみ

肝心のはなしが枝に亀の鳴く

延昭

枝分かれせし一枝を挿床に

和葉

春寒の椅子並べ置く体育館

稀香

明き陽に惑はされたり街春寒

由紀子

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

伸びしろとは空青きこと松の芯

妙子

大池に留鳥多し春の虹

々

初虹の色数へつつ隣町

恵美子

初緑たづぬる人も威厳あり

々

忘るること多き日々なり春の虹

峰雄

天突きて風の音聴く松の芯

竺仙

鏡には父の面影春の虹

いちい

緑立つ道着ま白き少年ら

千春

春寒し猫のはなさぬ我の膝
跳ね橋のおるる枝城月おほろ
花吹雪枝城跡の伝承碑

順子
卓郎
徹平

春寒や思はず出でしわらべうた

チアキ

細枝で繕ふ柵や牧のどか

喜恵

坂東太郎枝川抱き春豊か

マスミ

樹木医が花の徒長枝整へり

和子

雨あがり一瞬の虹夫と見つ
春陽差す墓碑に行年九十歳
初虹や武蔵野に君葬る日

りこ
みどり
々

深爪の痛み走るや春の暮

敏江

さりげなく父に逆らひ松の芯

亜弥子

松の芯君はいつから反抗期

慶子

夕暮れや友と集ひて惜しむ春

サカエ

春の虹記憶たどれば父母の声

士史

柔らかき槍のすつくと松の芯

いちい

若緑うす着の若者カッポする

恵美子

春の虹アーチ描きて草野球

千春

桜見に来て群れなす胡蝶花に囲まれる

妙子

老松の元氣印や松の芯

峰雄

鳥の声若葉も聴くや日差し浴ぶ

りこ

潮止る堰に漂ふ花筏

みどり

初虹や違ふ夢見る国と国

鶴城

——以上特選



第三例会（東京）

五明昇報
曲淵徹雄

語るかにみかへり阿弥陀春の闇

順子

揺り椅子を揺らせばゆるる春の闇

〃

身八つよりをんなほどけて春の闇

萬蝶

春の闇タトゥーの女郎蜘蛛の艶

〃

木の幹に人の貌あり春の闇

理恵

燐寸の火瞳に揺るる春の闇

千祐

武将塚沈め高野の春の闇

昇

抱く子の桜明りに染まる頬

以上特選

何やらの鳴き声残し春の闇

雅夫

金字浮き出て紺紙金泥春の闇

星歩

さくら満ち日曜画家を虜にす

順子

さよならは春の闇へと紛れ込む

理恵

春の闇さても令和の米騒動

千祐

心字池を鯉の一擲春の闇

萬蝶

下町の気風に馴染み残り鴨

徹雄

第四例会（浦和）

石井喜恵報
反町修

火の山へ嘶き高き春の駒

昇

神の杜抜けて晴やか春の駒

光文

跳ねて跳ねて揺らす鬘春の馬

曆文

潮騒に耳欻つる春の駒

マスミ

笑ふ山ケープルカーの操りぬ

修

灯台は飛び立ちさうに春の馬

恵子

ここまでは届かぬ電波山笑ふ

喜恵

春の駒解き放たれてほしいまま

以上特選

脱サラの蕎麦屋がふもと山笑ふ

延昭

休田のあくび居眠り山笑ふ

由紀子

常足を駆足にして春の駒

行雄

逃げる風追うて跳ね行く春の駒

マスミ

直屋より首長く出し春の馬

でん治

第一打左オービー山笑ふ

曆文

那須連山肩くみ合うて笑ひをり

玲子

若駒のダービーめざす大地かな

翔太

山笑ふ馬の遠乗り列作り

恵子

やはらかな風にハミング山笑ふ

光子

大方は仮寝の風車山笑ふ

昇

揺らしつつ渡る吊橋山笑ふ

喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江報
河野はるみ

寿の報持ち寄りぬ春の燭

千祐

名人の静かな一手春灯

義子

麗かや太鼓橋より鯉の影

宣子

講釈師いよよ佳境に春灯

玲子

春灯下源平咲きの浮かぶ路地

知子

麗日の卓華やげり千疋屋

佐江

春の日に影の寄り添ふ昇降機

以上特選

朱の橋を艶やかにして春灯

義子

艶やかな三味の音茶屋の春灯

玲子

帰宅時のほんやり月の麗なり

はるみ

魚跳ね波紋に揺らぐ春ともし

千祐

麗かや鳶鳴き交はし波の音

知子

春灯に浮かぶ坪庭春の宿

宣子

天平のみほとけの笑みうらけし

佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶報
石田慶子

馬の仔や産道を抜けはや立ちぬ

千祐

伐採の木の根に発芽別れ霜

千春

飛び六方で花道を踏む桜時

佐江

春の草手を結び合ふ道祖神

鶴城

道化師の化粧ゆるりと花の冷え

詠子

盲にも泪の跡や名残霜

萬蝶

晩霜や玻璃の歪みし御用邸

〃

別れ霜異動の沙汰は立ち消えに

以上特選

道化には遠き恩師の四月馬鹿

星歩

春炬燵道理説く人髭薄く

ひろこ

花見山大道芸のジャグリング

慶子

別れ霜観音巡りの旅仕度

稀香

花壇にぼんと象のじょうろや忘れ霜

マスミ

千春

折鶴に息を吹き入る別れ霜
 忘れ霜あの日が終の別れとは
 人恋うて名残の霜の降る夜かな
 別れ霜駅にちやつきり節流れ
 ひとつづつ念珠つまぐる別れ霜
 春深む京の都に水道橋

はるみ 鶴城
 佐江 千祜
 詠子 萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

花筏さつと面舵順潮に
 病室はみな花の名よ春暮るる
 夢の跡なる古城や花筏
 花筏仔牛とまがふ黒バイク
 花筏突つ切る快樂舟下り
 遠足の最後尾には新教師
 花明り定年の娘と杯上ぐる
 花筏お椀の舟を出しませう

千津子 人美
 洋子 千枝子
 和子 道子
 早苗

——以上特選——
 洋子
 人美
 ノルン
 千津子
 和子
 道子
 千枝子
 千世子

行く先は風におまかせ花筏
 花筏残れる花や後の便
 花筏明日は我が身か風まかせ
 観覧車黄砂に煙る須磨明石

満耶子 さわゑ
 鳴田洋子
 早苗

昔話あれこれ 47

師輔百鬼夜行に遭遇

何時の事かはわからないが、師輔公が百鬼夜行に遭遇したということだ。夜更けて内裏から帰宅途中に車の簾をさげさせて「車の牛を車から外して轆を下ろせ」と指示した。牛車の左右にいた車副は不思議に思ったが、轆を下ろした。隨身や前駆の者たちも、何事が起つたのかと、車の許に参上すると、師輔公は車の下簾をさちんと垂れ、まるで高貴な方に畏まつてものを申し上げるような様子で笏を取りつつ伏している。

「車は榻しにのせてはならぬぞ。隨身どもは轆ひきの左右、輓ひきの辺りに出来るだけ近く寄つて先払いの声を大きくあげよ。雑色どもも声を絶やすな。前駆の者どもも車の近くにおれ。」と命令し、自身は「尊勝陀羅尼」経を一心に唱えていた。牛は車の陰に引きたてさせた。一時間ほど経つて簾をあげ、「さあもう良い。車に牛をかけた車を進ませよ」と言ったが、お供のものは、何が何だかわからなかった。ずつと後になつて、親しい人にだけこの話をしたという事だが、この様な珍しい話はいつの間にか世間に漏れたらしい。

*百鬼夜行 さまざまの妖怪が列をなして夜行すること。
 曆の上で百鬼夜行が出現する「百鬼夜行の日」に、百鬼夜行に遭遇すると死ぬと言われているため、貴族などはその日は夜の外出を控えたという。

各地句会



柿の木塾 (浦和)

春曉のふはと分厚き玉子焼
一番機春曉の空震はせて
南無大師蜂の迎へる札所寺
朝の教室蜂一匹に惑はされ
どの花に行かうか蜂のホバリング
荒削りの円空仏に熊ん蜂
蜜蜂の角角飛びて好きな花

りんどう俳句会 (浦和)

園めぐる影やはらかし春日傘
花柳の匂ふばかりや春日傘
竹秋や年深き身に乾杯す
浅草や粋な姐さん春日傘
さやうなら背中で回す春日傘
古書市の探すモード誌春日傘
ゆく春のまちに三代写真館

恵子 章嘉 かつ子 和葉 節代 和子 君夫 順子 翔太 夕峰 徹雄 風子 卓郎

たかな俳句会 (川口)

薄れ行く昭和噛みしめ草の餅
長閑さや翁の心雲に乗り
カピバラ似知事の祝辞の長閑さよ
知床の流水見るも今は独り
目玉焼き夫に両目をのどけしや
散る桜枝覽に残る若き魂

若枝句会 (浦和)

草臥れてハーブティーと草の餅
幟立つ八十八夜茶の香り
湯に浮かぶ月の八十八夜かな
たんぼの絮毛震はせ旅支度
蒲公英や被災の跡のモニユメント
草団子父と散歩の内緒事

珊瑚の会 (浦和)

残花なほ古城に高き野面積
残る花カルポナーラと白ワイン
余花残花ひとり帰る丸木橋
遙か来て残桜の院なほ深し
手の平に月日の光陰さくら貝
散りしるる一樹の残花夕日影
桜貝花びらほどの朱を含み

義子 みのり 福美 小美 鶴城 泰生 泰子 敏江 貞代 昇 恵子 史代 広子 和子 和葉 かつ子

引く波の優しき間合さくら貝
潮騒を机上に聞くや桜貝
洛北の小雨に煙る残る花
ミモザの会 (横浜)

虚子も来て御座すか伊予の花祭
甘茶を三たび釈尊のつやつやと
大木の白木蓮咲けり主はなし
配膳のネコ型ロボット蜆汁
合唱のうたごゑ天に花祭

春霞意気消沈の星条旗
住職のくばるあめ玉花祭
消える時は桜ふぶきの渦の中
蝌蚪の会 (浦和)

轉の乱れて二羽の飛び失せり
轉やここよここよと知らせをり
轉の輪唱となりクレッシェンド
朝日影轉り探し窓を開く
春の海キララ雑念を持ち去れり
雑草の中の王様蓬かな
雑種てふ猫生まるるや猫は猫
ムスカリの雑草の中色放つ
熊ベル付け牛糞踏みぬる
箕に盛れる行者大蒜風矯むる
麗らけし釣師のびくは雑魚ばかり

喜恵 節代 マスミ 史代 玲子 栄子 美千子 詠子 萬蝶 慶子 千春 風舎 さち子 ひさの 幸子 しく 元美 礼子 秀子 夏野 月子 宣子

芽吹句会 (浦和)

人生語る母の手の皺春惜しむ
洪鐘のわたる嵯峨野路春日傘
春の宵引く手数多の講談師
うららかや物言ひたげな陶狸
春日傘かざせばうれし母形見
手から手へ嬌声運ぶつくしんぼ
四月馬鹿手紙捨つるは嘘ならず
うららかや交はす握手の温きこと
待ち人來ひときは高く春日傘

千重子
玲子
富子
久美子
弘子
ひろこ
チアキ
道を

軽快な草津の湯もみ春の夜
湯治湯の窓へちらつく涅槃雪
図書館の窓辺のむすび春の昼
湯上がりの赤子さらさら桃の花
湯気たちて春筍匂ふ夕厨
春昼の脈とる女医の赤き爪
からからと絵馬風に揺れ春の昼
道の辺を彩る小花春の昼
裏庭に猫の抜け径春の昼

美子
翔太
桂子
久美子
幸代
卓郎
知子
チアキ
かつ子

牧神も夢路を辿る目借り時
目借時ぐるぐる廻る般若経
花大根襲の色を解き放つ
櫂の会 (浦和)
屋形船ゆれて川面に朧月
薄絹のヴェール被りし朧月
朧月父と諍ひ十九の夜
白寿まで生き抜く配慮花衣
送り出す女将指差す朧月
气温差に戸惑ふ今日の花衣

秀子
道を
茂子
文子
あつ子
朋子
裕誌
富子
千重子

阜月の会 (浦和)

春陰に誰も採らない自信作
鳩時計三時を告ぐる日永かな
ワンハーフ廻るゴルフ1日の永し
乗り継ぎて老舗を食ぶる日永かな
桜鯛抱いて二度目の祝ひ節
地下街に春の匂ひのただよへり

山菜
光代
珪子
曆文
さいち
更穂

山駆くる修験道者や雲の峰
行く春や寿司もて昼の大野原
春の果焼きあご煮出す弱火かな
まなざしの我にやさしき春の馬
三つ星のシェフ監修ランチをみどりの日
跳ね上がる土の匂ひや春の馬
散る桜掃き清むこと修すこと

真由美
葉子
直子
京子
鶴城
宏治

芙蓉句会 (浦和)
心做し視力もどりぬ若葉風
天心を外して短か春の虹
大滝を跨ぎて春の二重虹
和歌山水明句会 (和歌山)
春風や生れてすぐ立つキリンの子
春の雨二人乗りする人力車
幼見らこけつまるびつ蓮花畑
ばちばちと薪の匂ふ春の宵
手を引かれ稚児行列や花まつり
枝垂桜川面を覆ひ夢の国
憂ふなり老木化する桜の木
生脚のふくよか眩し初燕

税子
美子
和子
道子
千枝子
千世子
満耶子
きわゑ
洋子
廸代

俳句の手ほどき (岩槻)

時計屋の針はてんでん春の昼
春昼をつんざく二重衝突よ
湯上りの赤子受け取る春の宵
無住寺の縁に半跏坐春の昼
滝行者拍手二つ湯殿山

延昭
佐江
義子
徹平
忠男

目借時我は毎日目借時
駐在の人柄もよし花大根
夕さりの里の明かりや花大根
地下鉄が不意に二階に目借り時
釈迦像の脇待ねぶたき目借時
菜園や吾が大根の花盛り

忠男
燈女
栄子
徹平
卓郎
風子

野ばらの会 (浦和)

半眼の白衣観音春眠し
助手席の話とぎれて春眠し
右ほほに消しゴムのかす春眠し
春眠に合はせ鈍行列車揺る
風光る花びら追うて黒門へ

秀子
栄子
茂子
夏江
みき子

雛の会 (浦和)

理不尽を無理矢理通す万愚節
リハビリの理学士厳し春愁ひ
一番茶理屈はいらぬ香り立つ
転がされ毛刈の羊さるるまま
森と湖つなぐせせらぎ春の蟬
理想郷みなで造るや植樹祭
みささぎに松蟬の鳴く静寂かな

はるみ
燈女
輝翠
公子
喜恵
チアキ
佐江

円卓の会 (浦和)

プリムラの鉢爾肅と武家屋敷
シニールなる絵画のごとく蜃気楼
犀川のほとりの寺や花あんず
星朧億光年の旅の果て
独り住まひの門に鉢植のさくら草
新札に旧札混じる花の茶屋
偽りを演じゐる吾や蜃気楼

卓修
翔太
道太
京子
亮一
鶴城

りそな俳句会 (浦和)

日溜りは惰眠の埜塙黄水仙
三陸に鎮魂ラッパ黄水仙
駅舎までひらり花びら桜まじ
桜まじ舳先に躍る大漁旗
取り舵にゆらく船体桜まじ
小梅の会 (浦和)

道
建治郎
久美子
マスミ
雅夫

砂を盛り砂を崩して春日かな
初めての手紙を母へ卒業す
ミロ展の不思議をまとふ桜かな
春時雨静寂の中に屋台かな
素つぴんの朝の挨拶町うらら
若狭水明会 (若狭)

進
隆文
恵子
隆然
道

若狭水明会 (若狭)

春の宵歩み初めの児を囲む
蛤や縄文人に逢ひに行く
ひらがなでしやべる子の手に鼓草
そぞろゆく繋ぐ手ぬくし春の宵
お酒なら何でもよろし春の宵
蛤のはくつと開いて鍋笑ふ
新入の挨拶固し春の宵
手土産や家路を急ぐ春の宵
春の宵出し惜しみする兄の芸
春宵や灯火は淡し笛太鼓
柔らかな返事してゐる春の宵

祥子
昭代
寛久
友夏
郁子
和風
笑風
風花
初花
保人
鼓

焼蛤匂ひが誘ふ浜の小屋
春の宵路上ライブの人だから
春立つや高松塚の飛鳥美女

鶴川山百合句会 (鶴川)

いつの間に替りてをりぬ卒業歌
明日はもう飼育係もなく卒業
直角に卒業証書受け取りぬ
卒業や手漉きの和紙の証書受く
祝卒業！黒板アートの花吹雪
卒業証書丸めて覗く未来かな
四番まで校歌うたひて卒業す
春みたび会へて嬉しや石畳
瑠璃色の風の中ゆく卒業子
神戸大池句会 (神戸)

雄二郎
史代
広子
千春
萬蝶
理恵
美千子
うさぎ
玲子

遠山も包む匂ひや花の色
彼の人にこの香よ届け枝垂れ梅

千津子
早苗

野菊の会 (与野)

命鮮やか樗大樹の緑たつ
中州より水艶うかがふ春の鴨
抜歯あとの洞に潜みし春愁
他愛なく貴方を想ふ夕ざくら
歩行者天国ひらりひらりと春シニール
さざ波のやうな人ごゑ春の宵

美代子
和子
清子
倭子
恵子
光子

櫻 蔭 句 会 (浦和)

図書室の黙にさざなみ春の雷
春雷過ぎ試合始まる甲子園
ミシン踏む春雷遠く聞えたり
春雷や木々に息吹の触れ太鼓
姉いもと机並べて春の窓
春雷や法度の恋も人はして
春雷や交番の灯の煌煌と
まだ遠き音のうねりや春の雷
ピル窓に午後の春陽の彩れり
春雷やとどろき渡り樹々ふるへ
春雷や鎮守の森を揺すりをり

あゆみの会 (浦和)

由紀子
美智枝
美子
行雄
多美子
茂子
公子
真理
久美子
千恵
幸代
靖子
俱子
啓子
重子
和子
藻好

青 葉 の 会 (浦和)

若芝に転がる園児大はしやぎ
芝青みボール打つ音響さけり
若芝に庭がまるごと若返る
若芝が庭園灯で息を吹く
新婚や若芝映ゆるマイホーム
若芝を踏めば足裏に地の息吹
若芝に寝ころび君と観る星座
さざきサークル (浦和)
暖かやブロンズ像が背伸びする
子らにかくる駐在の声あたたかし
寄添ひて語る看護師歩のぬくし
春愁や約束なぜか重くなる
木曾馬のまなこやさしく春ぬくし
春愁ほほゑつきて中也の詩
春暖や子とふたりして厨事
山菜を分くる濡れ縁あたたかし
コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

公子
美智枝
美紗子
洋子
真理
啓子
輝翠
昇
健司
和
俱子
光子
由美子
啓子
和子

吾影に酔うてつまづく春月夜
春月夜我が子抱くかにマンドリン
清貧は男の矜持目刺焼く
めだか句会 (浦和)
あららら居たはずの蝌蚪脱走か
桜薬ふりて繁茂の季を知る
手の指をぬるりすり抜け川の蝌蚪
清流の五線譜泳ぐ蝌蚪の群れ
踏む足の罪許されよ桜蕊
桜蕊ふる水夫奏づる波のおと
手を焼きし吾子にまもらる夏隣
蛙子の集る所田水かな
フランチェスコや地塩ともなる桜薬
お供には焼売弁当旅うらら
桜薬ふる罪ささくる祠かな
蘭の会 (浦和)
式終へり母にラインの新社員
桜狩者崩れいもと酒旨し
春陰や崩し字で書く決別状
のどけしや光る入江の舳ひ船
右做へ同顔ずらり入社式
一つ家に独吟の節長閑なり
山上の牧や触れ合ふ山羊のどか
のどけさや茶筌をくぐる湯の匂ひ
散るさくら野点の脚を崩しけり

美枝子
洋子
昇
道代
和子
美津子
恵美子
尚己
六弦
楽
章嘉
月を
はるみ
知子
和子
伸子
小麥
風子
夕峰
さよ子
風舎
寿夫
月を

新 樹 の 会 (浦和)

鳥雲肩の瘦せたる武甲山
暖かやこふのとり飛ぶ佐渡島
春夕焼黒く遠のく佐渡島
鳥雲山の彼方に鄙の里
花の下我も輪に入り佐渡おけさ
華やぎし山も一服鳥雲

若 鮎 句 会 (浦和)

櫻の芽を束ねて箆に野のひかり
花雲氷川だんごの串二本
花雲昼に賑はふ立ち飲み屋
川べりの亀ゆつたりと花曇り
遠足に勝ち負けのあり菓子比べ
じやんけんで勝負のつかぬ花曇
遠足や紅白帽の畝長し
殿はいつも小走り遠足子
三方に盛る束脩の春あふぎ
傘もたずそぞろ歩きの花曇り

☆ ☆

喜 月 稀 山 香 芳 ひと 秀 鶴 風 道 清 徹
夫 を 貴 菜 真 音 春 と み 子 城 子 を 吉 修 雄

水明夏行のご案内

下記の日程にて水明恒例の夏行を開催いたします。7月号に添付予定の「参加申込書」を使用し、参加費を添えて7月22日必着で発行所総務部までお申し込み下さい。大勢の皆様のご参加をお待ちしております。なお、三日間の参加者には皆勤賞を用意しております。

夏行は俳句の基本の一つである『席題』で詠むことを勉強する場です。各日共に季語による題が一題、詠込みによる題の一題が出題されて、計三句を投句していただきます。

- 【日 時】 第1日目 7月29日(火) 13:00～17:00 (受付:12:30)
- 第2日目 7月30日(水) 13:00～17:00 (受付:12:30)
- 第3日目 7月31日(木) 11:30～17:00 (受付:11:00)

- 【場 所】 浦和コミュニティーセンター
(浦和駅東口 「浦和パルコ」10階)
- 第1日目 : 第13会議室
- 第2日目 : 第15集会室
- 第3日目 : 第15集会室

- 【参加費】 各日 1,000円
- 【申込締切】 7月22日発行所必着

事業部

水明創刊 95 周年 記念祝賀会・全国大会のお知らせ

■記念全国大会

日時 令和 7 年 9 月 28 日（日曜日）
会場 ロイヤルパインズホテル浦和
〒 330-0062 さいたま市浦和区仲町 2 - 5 - 1
行事 ・水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞、鼓笛賞、山紫賞の表彰
・季音昇欄同人、新季音同人、新同人への委嘱状授与
・大会記念作品の表彰（俳句、評論、エッセイ）
・大会兼題句の入選発表、表彰、講評

■記念祝賀会

日時 令和 7 年 9 月 28 日（日曜日）
会場 ロイヤルパインズホテル浦和
〒 330-0062 さいたま市浦和区仲町 2 - 5 - 1
行事 ・来賓挨拶（現代俳句協会会長高野ムツオ氏、遠山陽子氏、池田澄子氏などを予定）他
・アトラクション他
新誌友紹介。季音同人、新同人の発表。
兼題入選句の発表と授賞、講評等。

※大会・祝賀会の時間および参加費等の詳細については改めてご案内いたします。

水明俳句会 水明創刊 95 周年記念全国大会実行委員会

水明創刊 95 周年記念特別企画

水明創刊 95 周年を記念して、記念特別作品を以下の要領で企画しました。全ての誌友・同人・季音同人の投句をお願いします。9 月・10 月合併号に掲載する予定です。

投句要領 【兼題】 「水」 「明」

※詠み込み・通季（春・夏・秋・冬・新年いずれも可）で一句ずつ

【締切】 7 月 25 日

※投句用紙は 6 月号に添付します。

水明創刊 95 周年記念事業 実行委員会

水明創刊九十五周年記念

兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるってご応募ください。

兼題

「雲の峰」

入道雲、積乱雲、雷雲

「螢」

ほうたる、螢火、
初螢、夕螢、宵螢、
源氏螢、平家螢

「白」 詠込み

※右の傍題以外は不可とします。

句数

通じて二句（一組）

- ・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。
- ・組数は制限しない。

出句料

一組につき千円

締切

七月三十一日（発行所必着）

※投句用紙（水明六月号に同封）を使用のこと。コピーも可。

風 声

○角川俳句四月号——「合評鼎談」欄

作品8句 山本鬼之介「還りくる春」を黒岩徳将、山西雅子、守屋明後の三氏が鑑賞

黒岩 立春大吉たのもしきかな實母散

〔實母散〕の音感の力もあって、葉を待みにしているのが分かる。老いてゆく自分というものを、大らかに受け止めている感じ。

ミモザ咲き心の中をパリジエンヌ

気持よくパリジエンヌが闊歩していくような気分。流れるようにこの二句があり、春に対する広やかな受け止め方が好きでした。

山西 黄色いミモザを見てみると、心の中にパリジエンヌが現れるのではなく、（心の中を）闊歩して行く。通り過ぎて行く動きが効いています。動的で、明るくて快活な句。

渡し場の舟還り来よ猫柳

静かな句。かつてここに渡し場があり、舟が生き生きとあつたと解釈した。今はそこに無い。還つて来て欲しいと思う自分。そこに（猫柳）があり、猫柳もそう感じているかもしれない。

守屋 風光り県代表に相撲部が

「相撲部が県代表に風光る」という作り方もあつたでしょう。でもそうはせず、下五に（相撲部が）と置いた。この

ことで、県代表になった喜びが強く伝わってきます。

○俳句四季四月号——「巻頭句」欄

爪草の足駄のひびき別れ雪

からくりの茶坊主びたと春の昼

夕ざくら背に切切と「御立ち酒」

鬼之介

〃

〃

○現代俳句四月号——「第一回現代俳句『風を詠む』」欄

タンポポの上とほり来し風に倦む

春炬燵一日長者の心地かな

三月や宮古ブルーの海開き

春真昼異界まさぐる内視鏡

歌舞伎座へ後ろ姿の春日傘

日光へ続く街道松の花

頭が高い控へをらうよ葱坊主

竹の春津軽の宿の文机

金管はサンバのリズム風光る

菊池ひろ子

大塚茂子

小駒さち子

近藤徹平

反町 修

茂木和子

鳥羽和風

檜鼻ことは

田寺玲子

○現代俳句一月号——「『風を詠む』秀句を探る」欄

江戸戸昭氏の感銘八句抄に

春真昼異界まさぐる内視鏡

瀬藤芳郎氏の感銘八句抄に

頭が高い控へをらうよ葱坊主

近藤徹平

鳥羽和風

○くちら（中尾公彦主宰）四月号——「受贈俳誌美術館」欄

料峭や万感こめて笙の笛

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）四月号——「現代俳句月評」欄

小倉喜久江氏による鑑賞で

渡し場の舟還り来よ猫柳

鬼之介

「俳句」二月号「還りくる春」より

渡し場の舟という語から真つ先に浮かんだのが「矢切の渡し」。葛飾の柴又と、対岸の松戸の矢切を結び、江戸川を渡る。江戸時代は、対岸の農地に行く農民のみに許されていた渡しだという。今では都内に残る唯一の渡しとして、

観光客が多く訪れる。「猫柳」から川辺の景が見える。渡し場で舟を待つ作者のわくわくした気分が「還り来よ」の呼びかけの措辞から伝わってくる。春は命の甦りの季節。手漕ぎの舟で十分ほどで対岸へ。江戸情緒残る景や川波を眺めながらの小旅行で、非日常を味わっている作者が羨ましく思えた句。

○好日（高橋健文主宰）四月号——「受贈誌御礼」欄

伝統の一戦ここに空つ風

○こんちえると（関根道豊版元）四月号——「受贈俳誌お礼」欄

「水明」三月号から

野仏に供花の匿路や草青む

まゆ玉を迂の地藏に馬頭碑に

開戦日臨時ニュースのいま昔

今生の再会ならず冬に入る

漱石と歩むがごとく冬日和

「水明」四月号から

石山かつ子

日高道を

清水桂子

吉川拓真

鬼之介

新 暦文 5 口

合計15口

かぎりなく添水を鳴らす春の水

建国日印度独立戦士の像

十二神将の二人は跣沓返る

絨毯に乗りて浄土の見学に

冬鷗立つ一本の係留鎖

雪嶺（石本雪鬼主宰）四・五・六月号——「受贈誌」欄

月白や蹶起の森が動き出す

奮ひ立つ気象予報士今朝の冬

白鳥（高松文月主宰）第七五号——「受贈俳誌より」欄

麗しき木の葉をひろふ隠れ道

菜の花（伊藤政美主宰）四月号——「諸家近詠」欄

書割にしたき景色や夕枯野

（日高道を抄出）

鬼之介

境 延昭

大橋迪代

清水桂子

吉川拓真

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

鬼之介

水明発展基金御礼（敬称略）

—令和七年四月三十日現在—

丸山マスマ

5

口

池田雅夫

5

口

新 暦文

5

口

合計15口

後記

五月号では、六賞受賞の方々と一緒に合わせて季音の各欄に昇欄の方々をご紹介します。

五月号でお約束致しました通り今号では受賞された方々のお喜びの声を特集しました。受賞者をご存知の方、誌上でお知りになった方、様々と思いますが、どうぞ共にお祝い申し上げます。

また、号を追って、受賞の方はかりでなく、新しく同人になられた方等もご紹介したいと思っております。

ところで、水明創刊九五周年記念特別作品(俳句・エッセイ・評論)が五月二五日締切りました。やがて入選者の発表がありますので、応募された方も、されなかつた方もお楽しみに！

九五周年を記念して全員参加の「水・明」二句の応募締切は七月

二五日です。こちらは水明人全員参加ですから、義務と思つて必ずご投句なさつて下さい。投句用紙は本六月号巻末にあります。

さらに今月号には、全国大会の兼題句の投句用紙も同封致しました。こちらは七月三一日締切です。「雲の峰」「螢」「白」の兼題句でお詠み下さい。詳しくは九一頁をご覧ください。

新珠賞に応募された方が「はじめて十五句という大作を作りました。当落は問題ではなく、疲れたけれど、小さな自信がつかしました。よかつた。」とおっしゃいました。思えば水明人も思いがけない、俳句と邂逅して、作句に薫陶され、俳句の友人知人と交誼が生まれ、輪が広がった事でしょう。全国大会や吟行会等の行事も、ゆつたりと参加して、楽しみましよう。よろしくお願ひします。

(節代)

今月のはてな？

華府(かふ)
飄風(つむじかぜ)
先綾(さきあや)
可杯(べくはい)
雪火菜(おから)
万灯火(まるとび)
背守(せもり、せなもり)
巾子(こじ)
御蓋山(みかさやま)
祝女(はふりめ)
直屋(じきや)

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内にお願ひします。)

83 82 78 78 57 36 36 29 24 23 19 頁

水明

令和七年六月号

通巻一一三七号

令和七年六月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区程町四一〇一二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央美版

季音抄

山本鬼之介

鳶の足に絡み付く蛇空青し
卒業を仏前に告げ母子家庭
桜一枝挿して膨らむ独り居間
直角に卒業証書受け取りぬ
蜜蜂や日向の角を丸く飛ぶ
花筏お椀の舟を出しませう
牧神も夢路を辿る目借り時
子規庵の窓が切り取る朧月
山嶺へ別れ惜しむか春の雷
語るかにみかへり阿弥陀春の闇
草芳し万葉の野にゐる心地
薄れ行く昭和噛みしめ草の餅
俎板に王の風格桜鯛
校門くぐる少年の意気風光る
どの竹も水辺へ傾ぎ竹の秋
春の雲がばつと開く河馬の口
剃り上げて法師のつもり四月馬鹿
知らぬ子が見せてくれたる蝌蚪の瓶

鳥羽和風
永野史代
星野和葉
町野広子
茂木和子
森本早苗
原田秀子
丸山マシミ
松井由紀子
大場順子
梅澤佐江
森川義子
渋谷さいち
保坂翔太
横山君夫
笹本啓子
染谷風子
石川理恵

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

春浅しシャベル戸口に並ぶ街
 薄霞十七文字に誤字脱字
 裸婦像や春風まとふ幾重にも
 津軽富士望み城下は桜どき
 逆縁の墓にささやく春の星
 三月やジャングルジムに分け入る子
 卒業のカーテン閉づる美術室
 道標のたもとに忍ぶ葦草
 球乗りのピエロの涙春なかば
 日時計の影めぐりゆく春の土
 女坂あると知りつつ梅見坂
 抽斗にあの時の鍵なごり雪
 春疾風火影荒ぶる隅田川
 木の芽越しくると見れば安房の山
 ポスターの役者流し目花吹雪
 春の水花嫁映し舟着き場
 出漁の男振り向く山ざくら
 モノクロの微笑みのこす秋子の忌

寺町知子
 小林京子
 菅原真理
 岡田宣子
 反町修
 阿部幸代
 森下山菜
 皆川更穂
 飯田忠男
 丸屋詠子
 吉川拓真
 田中弘子
 霜多光代
 倉田星歩
 本橋稀香
 綿引まりこ
 岡本祥子
 元田亮一

句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 小林京子
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲昇雄 明淵徹
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町修
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水明例会案内

水 明 令和七年六月一日発行 毎月一日発行

(第九十八巻 第六号) 定価 一〇〇〇円